

---

# アンノウ

ラウス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アンノウン

### 【Nコード】

N6219M

### 【作者名】

ラウス

### 【あらすじ】

剣と魔法と中途半端に科学的な世界、エステア。

数年前そんな世界に飛ばされた【虚偽使い】、名前も性別も年齢も不明な虚偽使いが敵にも味方にも死人にも他人にも作者にも読者にも嘘を吐きながら代理人を営む物語

**嘘吐きじゃない虚偽遣いです(前書き)**

三作目です。

初めてプロットや下書きに挑戦してみました。

## 嘘吐きじゃない虚偽遣いです

「なあ、代理人」

「何ですか？」

「今日こそは教えるよ、代理人は男なのか？ 女なのか？」

「教えませんよ、私のトップシークレットですから」

「むう……じゃあ名前を教える」

「名前なんて唯の記号です、故に『代理人』で一向に困らないので教える必要はありません」

「あたしは代理人のことを本名で呼びたいんだよ」

「ふーん、そうですね……ジャブルネズティア・リヂネスです」

「……へえ、うん、変な名前だな」

「はい、今思いついたものですから」

「今？ じゃあ嘘じゃないか！」

「はい、まごうことなき嘘です。リリースさんはすぐ騙されますね」

「……嘘吐きは嫌いだ」

「おっと、私を卑怯な嘘吐きと一緒にしないでください、私は誇り高い【虚偽遣い】なんですから」

\*\*\*\*\*

剣と魔法と中途半端に科学的な世界、“エステア”。物語はこの世界で紡がれる。

キャロク大陸の西に位置する小さくも大きくもないごく普通の村、

ランド村。海に面していて海産物に恵まれたこの村には一風変わった店がある。

活気のある大通りから少し離れた位置にある宿屋の隣、レンガ造りのその店は小屋と言っていい程小さく、薄汚れている。木製の壊れそうな扉には金属の板が張り付けてあり、この世界の文字 エステア語 で『代理屋』と書かれている。

『代理屋』というのは所謂何でも屋みたいなものである。キャッチフレーズは『貴方が抱えている厄介事、面倒事、代理で引き受けましょう』だ。

胡散臭いことこの上ないが、今、その古びた扉の前で唸ってる少女がいた。

栗色の腰まである髪の毛をうなじのあたりで二つに縛り、緑の麦わら帽子のような形をした帽子を被っている。その整った顔は帽子の所為でよく見えないが、思案顔のようだ。それは勿論この胡散臭いレンガ造りの小屋に入ろうか入るまいか迷ってるからであろう。

服装は帽子と合ってる淡い緑色のワンピースに似た服、化学繊維なんてものは使われてる筈もなく、機織り技術もまだ未発達の世界だから若干ほつれや色が違つともあるが暑い今の時期にはピッタリの服装だろう。

そんな少女が店の前でオロオロしてると、突然扉が開いて人が出てきた。

中から出てきた人は女の人、赤色の髪の毛は腰どころかくるぶしまで伸びているロングヘア、顔つきは完ぺきに大人の女性、美少女というより美女といった方が似合う感じだ。服装は黒いコートに赤いシャツ、赤いホットパンツ。そして茶色のレンジャーが履くようなブーツ。

少女は女性の美人な顔と、ホットパンツから伸びたきれいな脚、

やや胸が残念だがやけに大人っぽい雰囲気。少女はわずかに赤面する。

女性は少女に気がつく、「この店に用があるの？」と訊ねた。

少女がコクリと頷いて肯定すると、赤色の女性はペアッと笑顔になった。

「代理人！ よろこべ！ 一か月ぶりの客だ！」

そう小屋の中に向かって叫びながら女性は中に入っていく。少女もそれにつられるように中に入った。

まず目についたのは久しぶりの仕事だ、と喜んでる赤い髪の女性。次に、部屋の中央に置かれた木製の大きめの机、そしてその奥に座る中性的な顔をした男性？ 女性？

性別が皆目見当もつかない程に中性的な顔つき、黒髪黒目で肩まで髪が伸びている。人によってはイケメンというだろう、人によっては美人と呼ぶだろう、人によっては三枚目と呼ぶだろう、人によっては美少女というだろう、そんな顔。

体格で判断しようにもそんなもの着て暑くないのかと思えてくる。ぶかぶかの黄色い服、胸が膨らんでるかどうかすら判らない。ちなみに少女の位置からは判らないが下は短パンだ。

「あの……」

少女は声を絞り出す。

「貴方が“代理人”さんですか……？」

そして『代理人』と呼ばれた人物は答える。

「はい、私が代理人です」

にっこりと笑う代理人、少女はまたもわずかに赤面した。

\*\*\*\*\*

「ペット探しね……」

少女がいなくなって代理人と赤色の美女だけになった小屋の中で赤色は呟いた。

「なんかあたしの出番は無さそうね」

「そうですねー、リスさんの出番はおそらく無いでしょう、ですが万が一の時のために一応私と一緒にいてくださいね」

代理人はそう言いながら手を上に伸ばし欠伸をした。

「さっきの女の子……リオちゃんでしたっけ？」

「ん？ 確かな」

「可愛い女の子でしたねー、あんな子に飼われるペットが羨ましいですよ」

「……何ソレ」

「嘘ですよ」

可愛かったのは本当ですけどねーつと代理人は笑った。  
赤色 リリスはジト目で代理人を睨んだ。

「そんな可愛い貌で睨まないで下さいよ」

「可愛っ……！」

「嘘ですよ、凛々しいです」

「……………」

はあっ……とリリスはため息を一つ吐いた。

「おつとリリスさん、ため息はいけませんよ？ ため息は幸せを逃がしてしまうのです。ついでに婚期や出会いも逃しま……つとすいませんごめんなさい調子こきました、だからその馬鹿みたいに魔力が込められた黄金の右手を下げて貰えませんか？ いや、ホント……」

「……………次に婚期とか出会いとか言ったら殺す」

「あれ？ そのセリフ三日前にも言ってますでしたっけ？」

「え？」

「嘘ですけどね」

「死ね！」

「あべらうち！」

代理人は奇声を上げて椅子から転げ落ちた。リリスの左手ビンタを食らったのだ。とりあえず黄金の右手じゃなくてよかったと代理人は密かに安堵しながら机に手をつけてよっこらせと立ち上がった。そして机の上に置かれた一枚の紙を手取る。依頼人の少女リオが書いたペットの特徴が書かれた紙である。

「黒毛の蒼眼……耳は尖がって尻尾は身体の半分ほどの長さ、体長は30cmほどで、鳴き声は『ニャン』……完全にネコですね」

最後の一節はボソツと呟いた。

「とにかく色々と訊き込みに行きましようか。何か知ってる人がいるかもしれません」

「そうだな」

リリースが同意するのを見て、代理人は紙を四つ折りにして短パンのポケットにしまった。

その時突然木製の古びた扉をノックする音が聞こえた。

「む?」

「どなたですかー?」

代理人の呼びかけに扉の向こうの人物は答える。

「ワシじゃ、村長じゃ」

代理人が扉を開ける。そこには白い髪とヒゲを生やした老人がいた。この人の名前はジョック・ハリスワード、此処　ランド村の村長である。

「何の用ですか?　村長。私たちはこれから仕事なので手短にお願います」

代理人が言う。

「あー……、ワシも仕事を持ってきたんじゃないかなあ……タイミングが悪かったかのう」

「へえ、どんな依頼ですか?」

「魔獣退治じゃよ」

\*\*\*\*\*

代理人は異世界人である。

それは別に特別隠していることでは無いし、村では周知の事実である。しかし、勿論そのことをいつもの嘘だと思ってる村人も多々いるし、本当に嘘かもしれないことである。

だが、それは【虚偽遣い】として生まれてから9割以上の物事に嘘を吐き、真実を隠し、嘘に嘘を重ねてきた代理人にとって至極久しぶりに吐いた真実であった。

まあそれはさておき……。

「魔獣退治かー」

リリスが呟いた。

「今度は私の出番が無さそうですね」  
「そうじゃな」

代理人の軽い口調に村長は深刻な顔で答える。

事実、代理人は魔獣退治にひどく不向きである。

まあそれは【虚偽遣い】としての口八丁が通じないことと、前の世界 日本での平和主義の所為で戦闘能力が低い所為なのだが……。

「まあ、代理人の出る幕はねえよ。この最強の魔法使い、リリ

ス・レッドバードに勝てる生物なんて代理人以外存在しねーよ」  
リリースが自信満々にそう言った。

そして　まるで自分が王者と言わんばかりの笑みを浮かべた。

## 女性に年齢を訊ねるのはマナー違反

- 「なあなあ代理人」
- 「何ですか？ リリスさん」
- 「代理人って異世界人なんだよな？」
- 「ええ、そればかりは嘘ではありません」
- 「でさ、どれくらい前からエステアに来たんだけ？」
- 「そーですねー……10年ほど前でしょうか」
- 「結構前からなんだね……ところで代理人って年齢とし幾つ？」
- 「リリスさん、女性に年齢を訊くのはマナー違反ですよ」
- 「じゃあ代理人は女なのか？」
- 「さあ？」
- 「じゃあ問題ない」
- 「……リリスさんには幾つに見えますか？」
- 「うーん……19〜21？」
- 「じゃあ私の年齢は18ということだ」
- 「何その絶妙な嫌がらせ！ しかも今決めた感に溢れてるセリフ！」
- 「それじゃありリスさんは幾つ何ですか？」
- 「……女性に年齢を訊くのはマナー違反だ」
- 「そうですね、で、幾つですか？」
- 「黙れ！」

\*\*\*\*\*

魔獣。

この世界において、魔獣というのは害悪な存在だ。家畜を襲い、生態系を狂わせ、時に人を襲う。

一般的には魔力を持った野獣と考えられている、凶暴なモンスターである。

今回代理人らが退治するのはそんな生き物なのだ、しかし、下手すると軽く死ねる依頼だというのに二人の表情はかなり緩みきったものだった。

### アロマスト密林

ランド村から少し離れた位置に存在するこの密林は、薄暗く、不気味で、獣が多数入り浸り、時たま魔獣まで現れる危険度が高い密林である。

そんな密林の中を、代理人とリリスはまるでピクニックにでも向かうような表情で堂々と歩いていった。

何故そんなことが出来るかというと、理由は一つ。

リリス・レッドバードがいるからだ。

「ぎゃうー！」

突然 それこそ奇襲のようなタイミングで現れた青い体毛の狼っぽい魔獣が吹き飛んだ。

原因は一発の蹴り。馬鹿みたいに巨大な魔力によって練られた

強化魔法』で強化、否、凶化された脚でわき腹に一撃。

それによって、魔獣特有の鎧のような青い毛と、鉄のような皮膚、そして鋼のような骨を全て貫き、破壊し、摩擦熱で溶かし、音速を超えた時に発生するソニックウェーブで吹き飛ばしたのだ。

最強の名は、伊達では無い。

「スプラッタ画像顔負けのグロい絵だなあ……」

言葉の割には平気なツラをして、代理人は言う。

それも当然、リリスと相對した生物は彼女がよっぼどの手加減をしない限りどう頑張っても皮膚がずたずたに裂け、内臓が飛び散り、大量の血が吹き出るのだ。もう慣れた。

かなり昔の話だが、一時期リリスは周囲から赤い髪は返り血で染まったものとか噂され、【血染めの赤】などの二つ名で呼ばれたこともあるとか。

まあ、勿論赤い髪は生まれつきである。

「……やっぱ、手加減って難しいな」

赤い最強は、ため息を吐きながら呟いた。

そして、リリスを先頭に二人はひたすらにアロマスト密林を歩く。

こんなところに来ている理由は二つの依頼について訊き込みをしたとき、とある情報屋から有力な情報を得たからである。

リオの飼ってるペットがアロマスト密林に入ってくのを見た、  
という情報と、

アロマスト密林で最近妙に魔獣の出現率が高くなっている  
という情報。

これは都合よし、と二人は勇んで密林に出撃したというわけであ  
る。

「……確かに、さつきから妙に魔獣とのエンカウント率が高いです  
ね」

「えんかうんと？ 異世界語か？」

「遭遇率ってことですよ、今日遭遇した生き物は草食動物十五匹、  
野獣が五匹、魔獣が三十二匹……明らかに異常です」

「よく数えてたなー、しかし、それは確かに異常だ……一回村長に  
話しておいたほうがいいんじゃないか？」

「そうしましょう」

そう言って、代理人は戻ろうと踵を返す。

「おろ？ 目印とかマーキングとかしてなかったのによくそんな堂  
々と歩けるな」

そんなリリスの疑問に、代理人は澄ました顔で答える。

「貴女が壊した樹や岩、そして獣の死体を遡れば大体わかりますよ」

見ると、薄暗い密林でもハッキリと判るぐらいにリリスが駆逐し  
ながら通った跡が付いていた。

\*\*\*\*\*

翌日。

代理人は古ぼけたベッドの上で目を覚ました。

四畳くらいの部屋に布団と小さなタンス、そして座布団もどきが数枚あるだけの質素な部屋。

代理屋の隣に位置する宿屋の三階、長期滞在の客用の一室である。

代理人は寝巻にしている桃色の服（これもぶかぶかで体格は確認できない）を脱ぎ、今日は黄色では無く、青色のぶかぶかシャツを着た。

ズボンは昨日と同じ色である。

そして三階から一階に下り、受付のおばさんと呼んで朝飯を頼んだ。

この宿屋、金を払えば軽い食事くらいなら出してくれるのだ。故に代理人はしょっちゅう朝飯を宿屋で済ませるのである。

「おまちどごさまです」

しばらくすると、赤色 ではなく青色の髪をした一人の美青年がトレイにおにぎりやたくあんみたいな食べ物に乗せてやってきた。異世界に来た当初は、食べ物を見た目が日本と大差なくて安堵したものである。

「ありがとございます、リリットさん」

「恐縮です。今日もこうして貴女と話すことが出来て……僕はそれだけで三日は頑張れそうです」

「ははは、大げさですよー」

青色の執事服っぽい服を着た青い青年　リリット・レッドバードは頬を赤く染め、「大げさではありません！」と叫んだ。

「その艶のある美しい黒髪は人々を魅了し、薄い唇は儂さを醸し出し、若干男の子っぽいところがさらにそそられる！　貴女はまさに……この世界に舞い降りた女神です」

もうおわかりだろうが、このリリット・レッドバードは代理人に心酔している。

そして、あの赤い最強との兄妹でもあるのだ。

「まあ……お世辞が上手ですね」

「お世辞などではありませんね……どうです？　この後一緒にお食事でも……」

「今朝ごはんを食べてる最中なのですが……」

……どうやら天然らしい。

「で……でわ、散歩は如何ですか？」

「それは素晴らしい提案ですが……仕事があるはずでしょう？」

「仕事で僕の貴女そんなに対する愛は遮ることはできません！」

「……リリットさん後ろをご覧ください」

「え？」



## 性別で愛を否定するのは愚かな行為だ

「なあなあ代理人」

「何ですか？ リリスさん」

「兄貴って代理人のこと女と思ってるよな」

「そうみたいですね、しかも恋愛感情すら抱かれていますね」

「……代理人って男かもしれないんだろ？ そこんところは説明したのかよ、男同士とか気持ち悪いぞ？」

「ちゃんと言いましたよ、でもリリットさんは『性別なんて関係ない！ 僕は代理人さんという人間を愛してるんだ』と豪語されました」

「……あんの馬鹿兄貴……」

「あんなに熱烈にアタックされると思わず惚れちゃいそうですよ」

「嘘ですよ、【虚偽遣い】の矜持……この前教えましたよね？」

「むう……そう……だな」

\*\*\*\*\*

朝食を食べ終わった代理人は、朝から賑わってる繁華街を歩いていた。リリスは、いない。

それもそのはず、今日はリリスと別行動をとることにしてたからだ。

実はというと、まだ村長からの依頼は終わっていない。何故ならアロマスト密林で確認されている魔獣の数は百を越えるし、原因は不明だが急激に数を増やしてるらしい。

つまり、今回の依頼は原因を発見、処理し、残党も狩らなければいけないという何気にめんどくさい依頼なのである。

そして今日は代理人が魔獣退治の前に承っていたペット探しの詳しい調査。

リリスが密林で魔獣の駆逐、うまくいけば原因の解明をする。

と、いった具合に別れてるのだ。

「あー！ 【きよぎづかい】のおにーちゃんだー！」

毎日年中無休に賑やかな繁華街を大した成果も無く七時間ほど歩いていた代理人に、一人の少女が幼言葉で突然呼びかけた。

まず目につくのが、髪留めと思われるでっかい鈴。ややカールした黒髪を二つにその鈴で縛ってあるようだ。

そしてクリっとした子供らしい目、口は喜びをあらわすように大きく開かれ端が釣り上がっていた。

服装は赤い線が入った黄色いローブ、その下に少年が着るような半袖半ズボンの身軽な服を着ている。

美少女だが、背が低く、言動も子供っぽいから美幼女というべきかもしれない。

ちなみに年齢は十三である。

「む？ おお、スズちゃん久しぶり。学校の帰りかな？」  
「うん！」

美少女　スズは手がもげるんじゃないかってくらい振りながら代理人に向かって駆けてきた。人波を上手に避けながら走り、代理人に飛びついた。

チリンと綺麗な鈴の音が鳴る。代理人は上手にスズを抱きとめた。

「おにーちゃん遊ぼー！」

「うーん、ごめんねスズちゃん。今仕事だから後でね」

「えー」

ぶう、とスズは頬を膨らませて怒ってるような仕草をするが、可愛いだけである。

「じゃあじゃあ聞いて！ 今日ね、学校のライホウのテストで一番を取ったんだよ！」

「おお、それはすごいね。将来はライホウ使いかな？」

「うん！」

ちなみに、スズの通ってる学校というのは所謂魔法学校である。

ライホウについては……いずれ語るとしよう。

\*\*\*\*\*

「さて、さつきも言いましたが仕事なのでこれにて」「うん、じゃあね！」

あれから話し込むこと三十分、代理人はやつとのこととで解放された。

別にスズと話すことは苦では無いのだが、いかせん仕事中心なので長時間話すことは避けたかった代理人にとっては三十分で済んだことはなかなか嬉しかった。

ちなみに最長記録は五時間二十八分である。

遠くなつてく小さな背中をしばらく見送りながら、代理人は思考する。

今回の魔獣騒動、確実に人為的なものだろう。

魔獣が生まれる方法は二つある。一つはマジック・スポットと呼ばれる魔力が集まつてる特殊な場所に野獣が留まること。これは膨大な魔力が野獣に宿り、魔獣になる。

ちなみにこの方法だと強い魔獣になる。何故ならマジック・スポットには常識外の魔力が集まつてるからだ。

分かりやすい例で言うと……リリスの五十分の一くらいである。

だが、この方法は有り得ない。

アロマスト密林は既に国による調査が終わっていて、マジック・スポットが無いことは確認されてるし、そもそも現在確認されてる全てのマジック・スポットは処理されている。

つまり必然的にもう一つの、人為的に魔力を注入されて魔獣にな

ったパターンに限られる。

別に魔法使いや魔術師なら魔獣を作るとは簡単なのである。ただ、野獣に魔力を注入したり、微弱だがマジック・スポットを意図的に作ることで可能だ。

「代理人」

聞きなれた声で呼ばれ、立ち止まる。

振り向くとそこには見慣れた赤色の髪を持った最強の美女、リリスがいた。

「どうでした？」

「上々、怪しい人工的な遺跡っぽいところもあったしそこから魔獣が出来る分の魔力も放出されてた。ただ……」

「ただ？」

代理人は首を傾げる。リリスは赤い髪を掻きながら言った。

「入口に『四獣結界』『八星結界』『十二柱結界』を三重で展開してあってしかも『二十四神星界』まで掛けられてた、流石のあたしでもぶち破るのには魔力を使いきっちゃうもんで代理人を呼びに来た」

「あ……何ソレ、四獣に八星に十二柱でしかも二十四神？……もしかしたら、この事件、私が思ったより大きい事件かもしれないね」

まあ二十四だろうと四十八だろうと何だろうと……代理人の能力の前では紙も良いとこだが。

「さてと、じゃあ今日はもう遅いし帰りましょう」

そう言って、代理人は踵を返した。

「んあ？ 今から行っても夜中には帰ってこれるぞ？」

「帰り道はどうするんですか？」

「ああそっか」

リリスは納得したように頷いた。

\*\*\*\*\*

「ところで代理人」

「む？ 何ですかリリスさん」

「この前【虚偽遣い】としての矜持で友達じゃない人には敬語で話すって言ってたけどスズちゃんには敬語じゃないじゃん？ て、ことはスズちゃんは代理人の友達ってこと？」

「まさか。私がスズちゃんに敬語を使わない理由は別にあります」

「じゃあ何で？」

「私、ロリコンですから」

「……？ は？ ろりこん？ どういう意味だ？」

「社会に認められなくとも己の信念を絶対に曲げず、罵声を浴びても非難を受けてもただ一途に弱き子供を愛し、守り続ける戦士たちの総称です。私の元居た世界ではそういった同土なまがたくさんいました」

「……何かかつこいいな、ソレ」

「ちなみに別称は幼女愛好家です」

「ただの変態じゃねーか！」

守備範囲は広いほうです

「なあなあ代理人」

「何ですか？ リリスさん」

「代理人って本当にろりこんなのか？ いつもの嘘だろ？ いや、嘘であつてくれ」

「その辺のことは想像におまかせします」

「うー……じゃああたしって守備範囲に入る？」

「入りますよ」

「ホント？」

「胸のサイズだけなら」

「死ね！」

\*\*\*\*\*

翌日。

代理人とリリスは予定通りアロマスト密林に来ていた。

リリスが付けた目印を頼りに進むこと数時間。二人は漸く件の遺跡にたどり着いた。

先ず最初に正方形の緑色の結界が貼られている、四獣結界である。そのすぐ奥に黄色の八角柱の結界、八星結界。そしてその更に奥に十二角柱の赤い結界、十二柱結界。

全て、相当な手だれじゃないと使えないような高等結界魔法である。これだけでも十分な守りなのにそのまた奥に貼られている結界、二十四神星界。

黒色の二十四角柱の結界で、結界を極めた者のみ使えるとされる星界の領域まで達している超高等結界魔法である。

そして、その四つの結界の中央には下りの階段。この遺跡の入口らしい。

「じゃあ行きますか」  
「ん」

代理人が結界に触れる。本来、四獣結界は対象者以外が触れると四匹の獣が出現するという仕掛けを完ぺきに無視し、

四獣結界はパンつと音を立てて弾け消えた。

破片も飛ばさず、欠片も残さず、まるで元からそんなもの無かったかのように消え去った。

これが 代理人の能力、『魔力拒否』である。

ありとあらゆる魔力で構成されているモノを完全に無効化する能力 体質といった方がいいかもしれない で、対象が古代魔法だろうと神聖魔法だろうと何だろうとそれが魔力で構成されていれば問答無用に弾き消すという反則的な能力である。

まあ自分が集めた魔力さえも消してしまうので一長一短だが。

ちなみに代理人はこの体質を日本 というか地球人が全員持つ

ている体質だと推理した。

だから、あの世界には魔法が無かったんじゃないかなーっと、あくまで予想だが。

そして、続けざまに八星結界を弾き消す。本来なら八星結界は破壊されると空から隕石が八個降ってくるという仕掛けがあるがその仕掛けごと消して、十二柱結界へ手を伸ばす。

パンつと音が鳴り、結界が消える。

十二柱結界の仕掛けは破壊された瞬間に神の力が宿ったとされる十二本の柱が破壊者を千二百年間封印するといった仕掛けだが、勿論そんなものは発動せずに最後の二十四神星界に触れる。

結界の完全上位互換、星界といえども所詮は魔力。あっけなく星界は音を立てて消えた。

「さて、行きましようか」

「おう、てか相変わらず反則的な能力だな……」

代理人を先頭に、二人は階段を降りて行った。

\*\*\*\*\*

世界最強の生物、リリス・レッドバードは実は一度だけ戦闘で負けたことがある。

相手は『魔力拒否』という魔法使いには絶望的に相性の悪い【虚偽遣い】。

数年前に行われたリリスの敗北劇は、観客が一人もいなかった所為で知る人は代理人とリリスしかいないが、いずれその時のことは描写しようと思う。

それはさておき。

遺跡内は石で出来ていてよくあるファンタジーの遺跡といった感じだった、光が届かない所為で薄暗く、時折ある松明の光だけを頼りに二人は進んでいった。

途中、魔獣が数匹いたり古典的な罠（スイッチを押したら大岩が転がってくる）などをほぼ全てリリスの力で乗り切り、二人は最深部と思わしき場所にたどり着いた。

「……『元素結界』が貼つてあるな……触れると炎、水、地、風の魔法が放たれる結界だ」

「へー、そうですね。じゃあ行きましょう」

代理人は何事も無かったかのように結界に触れ、パンっという音を耳に入れながら最深部へと到着した。

続いてリリスも入る。

広い部屋だった。石で出来てる点はさっきまでと変わらないが、とにかく広い。

そして部屋の奥に妙な形の壺。壺の口からはピンク色の煙を出している。

おそらくあれがマジック・スポットを作り出してる原因だろう。

「何者だ」

そして、青いコートに身を包み、青い鞘と黒い柄の刀を腰に指して、バイザーのようなサングラスで目を覆った一人の男がその壺の前に立っていた。

「どうやってここに来た？ 結界はどうした？」

男は質問してる割にはそんなことどうでもいいといった感じの口調だった。

それに代理人は律義に答えた。

「私はどこにでもいるようなただの【虚偽遣い】です。こっちの赤いのはこれまたどこにでもいるような平平凡凡且つ弱小な【世界最強】リリース・レッドバードです」

嘔吐きまくり矛盾しすぎ、とリリースは思った。

「成程な」

青いコートを着た男は納得したかのように呟き、刀を抜いた。

「ようするに俺はお前らを殺せばいいわけか」

死は、平等だ。と男は意味深に言い、代理人とリリースへ弾丸のように突貫した。

「リリースさん」

「？ 何だよ」

「私、近接武器相手には相性が悪すぎます、頑張ってください」

「……了解」

リリスは膨大な魔力を使って強化魔法を発動。男の斬撃に対して蹴りで立ち向かった。

刀と脚が激突し轟音が辺りに響き渡る。

「む………！」

「………へえ」

青いコートの男は驚きの声を出し、赤い最強は感心したような声を出した。

ギーンっと明らかに刀と脚がぶつかっておきるような音じゃない音が響き、赤と青はお互いに距離を取る。

「「初めの一撃で殺せなかったのは久々だな」」

両者は同時に楽しそうな笑みを浮かべ、同時に同じ言葉を発し、同時に地面を蹴り再びぶつかりあった。

\*\*\*\*\*

インフィニテチレイズ  
「無限の刃群」

男は空中で両手を上に掲げ、魔力を込める。すると魔力で出来た白色の剣群が次々と現れ、宙一面を覆った。

「発射！」

そしてそれらがリリスに向かって一斉に襲いかかった。

「かっけーなその魔法」

リリスはにやりとした笑みを崩さないままそう言い、全ての剣群を拳で叩き割った。

「でも……無限インフィニティを名乗るにはまだ数が少なすぎるな」

煌びやかに光り飛び散る魔力の欠片の中でリリスはニツと笑った。

「……強いな、お前は」

男はどこか観念したような口調でそう言い、地面に着地した。

青いコートは所々が千切れ、サングラスもひび割れ、男自身も肩で息をしていた。

对象的にリリスは、黒いコートも赤いホットパンツも傷一つ無く、余裕綽々に欠伸すら掻いていた。

「で、どうする？ まだやるか？ ん？」  
「……………」

圧倒的。最強。無敵。

そんな言葉が、まるで人間にそのまま変異したような存在。

世界最強、リリス・レッドバード。

「味方でよかったですねえ……ホントに」

代理人はすっかり蚊帳の外なポジションのまま、ぽつりと呟いた。

その時、

「そこまでだ」

バチィっという音が鳴り、リリスの手前の地面が焦げた。

「はいストップ」

突如遺跡の壁や床が盛り上がり、棘となってリリスの進路を塞いだ。

「新手か……？」

新手が現れた。

人間関係なんて適当でいいんです（前書き）

虚偽遣いでググったらこの小説に着いた

人間関係なんて適当でいいんです

「なあなあ代理人」

「何ですか？ リリスさん」

「アタシたちって考えてみれば妙な関係だよな」

「……そうですね、友達でもないし、恋人でもない、助手でもないし……何でしょう？」

「【世界最強】と【虚偽遣い】なんて本来接点皆無だしねー、運命のイタズラ？」

「あ、もしかしたらリリットさん繋がりかもしれません」

「あー……、【虚偽遣い】と【世界最弱】か……確かに共通点はあるだろーね」

「ま、どうでもいいことです、人間同士の繋がりなんて所詮そんなもんでしょう」

「そだね」

\*\*\*\*\*

遺跡の最深部は、光源が松明しかないわりにはまあまあ明るい。松明の数が多い所為だ。

それ故に、新しく現れた敵の容姿などは容易に観察できる。

女性が二人。

一人は金髪紅眼の美女。黄色に近い髪の毛を後ろで一つに縛る

所謂ポニーテイルにしている。紅い眼は鋭くきつめな印象を与えている。

服装は動く易さを重視してるのか、黄色いノースリーブと黒いホットパンツ、手には黒い肘まである手袋　と、拳銃のような黒い筒にグリップとトリガーとリボルバーがついた物体、ライホウ。

脚は黒いブーツだ。

そしてもう一人は金髪碧眼の美少女、ただしこっちの金髪は黄色というよりクリーム色だ。

そのクリーム色に近い金の髪はふわふわのウェーブがかかっており、肩の下くらいまでの長さだ。

瞳はくりくりとしていて大きく、もう一人の女性とは対照的にかわいらしい印象がある。

服装はこれまたもう一人の女性とは対照的にフリフリなフリルやリボンが付いたワンピースに似たかわいらしい服装だ。色は髪と同じクリーム色に近い金色。

そして何故か黒い毛並みに青い瞳の魔獣に乗っている。

「……ノア、リリシャン……準備は整ったのか？」  
青いコートの男が訊ねる。

「もちろん、『計画』の完了まであと僅かだね！」

ウェーブがかかったほうの金髪の女が腰に手を当ててそう言った。

「早く帰るぞ、準備が整った今、こんな古ぼけた遺跡なぞ用なしだ」  
ポニーテイルの金髪の女性が抑揚の無い声で言う。

そうか、と青いコートの男が刀を鞘に収め、踵を返した。

瞬間。

バキィイツと何かが壊れる音が遺跡内に響き渡った。

「おい」

飛び散る岩の破片、舞う粉塵、その中を悠々と歩く赤色。

「逃がすと 思うか？」

あまりの魔力に、空間が、軋む。

敵前逃亡。戦う為に生まれた 否、造られた彼女にとって敵前逃亡は許されることではない。

例えそれが、逃げられる側だとしても。最後まで、最期まで、黒をはつきりと、決着をつけるのが彼女の信念であり矜持であり基本となるプログラムなのだ。

青いコートの男はそんな赤色を見て、フツと鼻で笑った。

「そんなに戦いが楽しいか？ 世界最強」

「あ？」

リリスは怪訝そうに眉を顰めた。

「俺が嫌いだね、戦うなんて」

だって と言葉を繋げる。

「相手を殺せないかもしれないじゃないか」

「……は？」

青いコートの男はリリースから視線を外し、懐から一枚の青い紙を取り出した。

「俺の名はジャック、ただのしがない殺人鬼だ。戦士でも剣士でも戦闘屋でも殺し屋でも人間でもないただの鬼、戦いなんて無くても殺せればそれでいい。むしろ戦うと殺せる可能性が減るから嫌だ」

そう言い、男は紙を破った。

その瞬間青い光が辺りを包みこむ。

「世界最強、お前はいつか殺す」

青い光が消えた時、もう三人の姿は無かった。

広い部屋に、赤い最強だけが残り、静寂が訪れた。

「……………アタシだけ？」

ふと気付いた疑問。虚偽遣いは何処に？

「いやあ、お疲れ様ですリリースさん」

そんな疑問を払拭するように代理人は現れた。最深部の入口から。

「代理人！ どこに行ってたんだよ」

「や、戦闘シーンとか出番無いですからもう一つの依頼、ペット探しをしてたんですよ」

「ペット……………ああ、うん、で、どうだった？」

「ええ、なんか魔獣になっちゃったね」

「わりと重要で重いことをあつさり！」

「しかもあのふわふわフリフリワンピースを着たキチガイ女が乗ってた魔獣がそうです」

「マジでか！」

「嘘です」

「嘘かよ！ どこからどこまでが？」

「『嘘です』からです」

「ようするに本当なわけね」

「さあ？』『嘘です』からです」が嘘かもしれませんか？」

自分は 存在自体が嘘だから。

無意識に無意味に無作為に嘘を吐き続ける存在だから。

そう、頭の中で呟く。

「……まあ、どっちにしろリオちゃんからの依頼は失敗ですね、手掛かりは無し、あのふわふわフリフリワンピースを着たキチガイ女が乗ってた魔獣がリオちゃんのペットだという証拠も保障もありませんから……はあ、鬱です」

「そうだなー、素直に謝るしかないんじゃないか？」

「私が素直に……？ ありえませんか……なんて屈辱的なんだ……【虚偽遣い】の一生の恥です……！」

「……じゃあ適当に嘘吐いて切り抜ければいいじゃん」

「ええそうします」

世界最低。リスの脳裏に一瞬こんな言葉が浮かんだ。

「じゃ、あの壺破壊して帰りますか、それで村長から依頼料貰っておいしいものでも食いにいきましょうか」

「……了解」

こうして、代理人に來た一カ月ぶりの仕事は終わった。

だがこれは序章であり、プロローグであり、前座だ。

これからエステアで巻き起こる大事件に片足を突っ込んだことを、まだ代理人は知らない。

いや、殺します

「そういえばさあ、代理人」

「うん？ 何ですか？」

「あのクリームウエーブの髪の毛のこと、えーと……ふわふわフリフリワンピースキチガイ女だっけ？ なんでそんな罵る感じの呼び方なんだ？」

「ああ、実はあの女私の実の妹でして……」

「ええ！」

「嘘です、あんなふわふわフリフリワンピースキチガイ女が妹だったら自殺しますよ……いや、殺します」

「……そんなにふわふわフリフリが嫌いなのか？」

「はい、着るとしても見るとしても吐き気が催してきます」

「そうなのか……じゃあ間違っても着ないようにしなくちゃな……」

「ええ、おねがいします」

\*\*\*\*\*

「科学博物館？」

赤色の美女      リリスが口にした疑問に、美少女      スズがうん

！      とにっこり笑った。

あの魔獣事件は不可解な出来事により幕を閉じた。

突然、魔獣が消えたのだ。全て。それこそ一匹の例外も無く完膚なきまでに消えた。

……まあ、十中八九あの、ジャックら三人が関係してるのだろうが……もう関係ない。

関係なんていらぬ。

「ここ最近で突如頭角を現してきた天才科学者、ハーリック・ワーカーズが生み出した最新科学の集約とも呼べる博物館のことですよ。一般家庭でも実用可能な空調装置や、小型の暖房器具などさまざまなものがあるらしいですよ」

「そこにね！ 魔法学校の遠足として行くんだ！」

「へー、興味あるな」

リリスはあごに手を当て感心したように頷いた。

代理屋。

今ここには四人の人間がいる。正直狭い。

【虚偽遣い】とリリスとスズと魔法学校の教師だ。

「そこでリリスさんをお願いがあるんですが……護衛を頼みたいのです」

魔法学校の教師が言う。ちなみに六十代くらいのおばあさんだ。

「護衛？」

疑問符をあげたのは代理人。

魔法学校の教師は丁寧な口調で答えた。

「はい、最近……魔獣やなんやらで色々物騒でしょう？ 科学博物館がある町は森を抜けた先なのですが……魔獣を倒せるような人物が今魔法学校には私以外なくて……そこでリリースさんに護衛を頼みたいのです。勿論、町に着いたら帰る時間まで好きにしてください。すし科学博物館に行くのであれば入場券もあげます、どうですか？」

「行く！」

リリースは即答した。

「あ、代理人さんはどうしますか？ 何なら入場券余ってますけど……」

「いえ、お誘いは嬉しいのですが遠慮しておきましょう」

そりゃまあクーラーとかストーブとかは代理人には見慣れたものだろう。

おばあさんはそうですか……と呟いてリリースに視線を向けた。

「じゃあ明後日、村の出入口のところに集合です。時間は6でお願いします」

「分かりました！」

「楽しみだね！ リリースおねーちゃん！」

「うん、一緒に回ろうねスズちゃん」

美女と美少女が手を取り合ってはしゃいでる様子を見て、代理人は目の保養ダナーっと思った。

「嘘だけど」

そう、代理人は日本語で呟いた。

\*\*\*\*\*

エステアの時間の表し方は、ほぼ地球と一緒にだ。

地球にとつての一時は、1とだけ書き、二時は2、三時は3と…

…まあ時が無くなっただけである。

分も同一で、一分は1、二分は2と表す。

一時一分は1・1（イチイチ）と表す。

そんなこの世界の基礎を思い出しながら、代理人は一人になった  
代理屋でくあつと欠伸を漏らした。

（……暇だ）

暇だ。暇だ。大事なことから二回言った。

「いや、三回か……」

括弧内も入れれば三回だ。

代理屋は基本暇である。それこそどこぞの万事屋のごとく。  
たまにある仕事が無ければ完全完璧二トトである。

代理人が本日何度目かの欠伸を漏らしかけた時、ノックの音が鳴

った。

誰ですか？ という代理人の言葉が出る前に、古びた木の扉はバ  
ンという音と共に開いた。

ついでにバキンっという音も鳴って、傾いた扉がギイギイと音を  
立てて閉じたり開いたりしてるが、まあ後で怒ることにした。

入ってきた人物の特徴を一言で表すと、『ガリ』である。

肉という肉を削ぎ落としたような細身で、頬がこけている。

だが背が高く、顔も中性的であるためもうちょっと肉が付けば女  
性からモテるであろう。

服装はこの世界には いや、地球でもか 異端で、漫画  
で科学者が……マッドサイエンティストが着るような白衣である。

茶髪その男は、代理人を見たたん眼鏡の奥の目を大きく開き、  
口元に笑顔を浮かべた。

「やあ、ハーリックさん、とりあえず扉を弁償してください」

男 ハーリックに代理人はやや低い口調と黒い笑顔でそう言っ  
た。

「すみません……つい興奮しちゃって……」

来客用の椅子に座りながら、ハーリックは頭を下げた。

「いえいえ、ちゃんと前のドアの二、三十倍の金をかけて弁償してもらえればそれでいいですよ」

「何気に怒ってますね……………」

「ついでに貴方が作ったクーラーをください」

「むちゃくちゃ怒ってますね……………まあそれぐらいならいいですけど……………」

それに、とハーリックは続ける。

「クーラーは……………というか僕が【天才科学者】と呼ばれるようになったきっかけの作品は全部アナタのアイデアじゃないですか……………」

「そうでしたっけ？」

以前、代理人はこの長身瘦躯の科学者に前の世界での科学知識を与えたのだ。

何時何処でどういった経緯で何故与えたとかは問うだけ無駄である。

どうせ無意識に吐いた虚偽から始まったことなのだから。

「記憶にぼんやりとしか残ってませんが……………」

記憶力が悪いわけじゃない、ただ単に無意識だっただけだ。

「とにかく、ドアだけは最低限弁償してくださいね」

代理人は念を押すように、そう言った。

「や、クーラーもあげますよ……………と、そうだ、本題を忘れるとこでした」

「本題？」

「ええ、ちよつと二つほどお願いが」

その“お願い”を聞いた代理人は、楽しみに頬笑み、片方を断り、片方を承諾したのであった。

人からの厚意はありがたく受け取りましょう（前書き）

長らくお待たせしました、すみません

人からの厚意はありがたく受け取りましょう

「代理人さあ」

「何でしょう」

「この村に来る前はどんな生活してたの？」

「そうですねー……、王都でいろんな人の好意を受けてこの世界の知識を蓄えたりお金を貯めたり色々です」

「ふーん、王都かー、行ってみたいな」

「行ったことないんですか？」

「うん、兄貴は何回か行ったことあるらしいけどアタシは無いな」

「へー、でもまあその内機会があるでしょう」

「そだね」

\*\*\*\*\*

エステアの科学は非常に中途半端である。

と、いか地球出身の代理人から言うと「何で？」っていうようなおかしな進歩の仕方をしてるのだ。

例えば、よく漫画であるようなものすごいスーパーコンピュータ以上のスペックを持ったパソコンがあるのにインターネットが無いとかTVゲームが一部の金持ちで嗜まれるとか、なのに空調設備は扇風機も無い絶望っぷり、原子や分子、微生物に関しては存在自体知られてない。

いや、知られてなかった。過去形な理由は、空調設備も原子も分

子も微生物も全部天才科学者、ハーリック・ワーカーズが開発・発見したからである。

……と、言うのは建前で、実際はハーリックはそれほど優れた科学者ではなく、【虚偽遣い】たる代理人の入れ知恵なのだが……。そんなこと知らない一般の人は、素直にハーリックを天才科学者と褒め、科学博物館を練り歩くのだ。

そんな一般客の中に世界最強ことリリース・レッドバードは混じっていた。

理由はただ単に魔法学校の遠足の護衛で、ついでに科学博物館を周ってるというだけだが、彼女は完ぺきに周囲の注目を集めていた。

この世界でも珍しい真紅の長髪、絵画から抜け出たような類まれなる美貌、身体から滲み出る世界最強の風格。

胸が無いのが残念だが、男女問わず彼女に見惚れていた。

が、リリースはまるで気にしてない。慣れてるから。

敵意は感じないし害意もない、ほつといても大丈夫だ。

「おつかしいなー……スズちゃん何処行ったんだ？」

赤い麗人は首を傾げた。先ほどまで茶髪的美少女、スズと一緒に色々なものを周ってたのだが突然はぐれてしまった。

しょうがない、今科学博物館にはたくさん魔法学校生がいるし、先生もいる、よっぽど変なところに行かない限り自然と魔法学校の誰かに出会うだろう。

そう思い、何処に行こうかと館内案内図を見ようとしたリリスの耳にアナウンスの音が聞こえた。

『ピンポンパーンポン、ただいまより三十分後、西館四階の広間で科学者ハーリック氏の演説、および新技術のお披露目を致します、ゴミ虫のように群がれ愚民共』

「……………」

酷いアナウンスだ、とリリスは……いや、このアナウンスを聞いた人はみな思っただろう。

まあでも、ハーリックの演説や新技術に興味がある。人の波は西館四階に向かって流れて行った。

そんな中、リリスも人の波に漏れずに西館四階に向かった。

「あ！ リリスおねーちゃん！」

雑踏の中、小柄な身体ながらも上手く人をすり抜けてリリスに歩み寄ってくる影が一つ。

スズである。チリンチリンと髪留めに使ってる鈴を鳴らしながらリリスのもとへたどり着いた。

「よかったー、合流できて……おねーちゃんの髪の毛のおかげだよー」

「はは、もうはぐれちゃだめだよ」

「うんー！」

そう言ってリリスはスズに手を差し出し、スズはそれを取る。

傍からみたら仲のいい姉妹のようだ。

「おっと、ここが四階か」

気づけば二人は西館四階広間に着いていた。

『えー、開始まであと十分ほどです。とっとと集まりやがねゴミ虫ども、八つ裂きにされてーか』

「……酷いアナウンスだね」

「……て、いうかどつかでこの声聞いたことがある気がするんだけど」

えーと、放送席は何処かなーつとリリースは魔法で視力を強化する。

「……………は？」

リリースは目をこする。こする。こする。こする。見る。

放送席と銘打たれた広間の一角にあるガラスで区切られたスペースにいるその人物、リリースもスズも見慣れた中性的を極めたような男か女か全く区別がつかない顔、リリースの赤髪より珍しい黒髪黒目、あちらもリリースたちに気づいたらしく、サムズアップ。

いや、

「何やってんだよ【虚偽遣い】！」

「うわっ!?!? どうしたのいきなり大声だして…………?」

「……………あそこ……………」

ピツと人差し指で放送席を指差す、スズはそつちを見て、目を細める。

魔法を使わないと結構見え辛い距離なのだ。

「あ……おにーちゃんだ……」

流石は魔法学校のライホウ試験トップ、視力は人並み以上にあるようだ。

……とまあそんなふうリリースとスズが困惑してる中、代理人は放送室でマイクを手を取った。

『では、ステージをご覧ください。稀代の天才科学者、ハーリック・ワーカースの登場です！』

ワツと歓声が沸く。広間に作られた学校の学芸会の時に使うようなステージの端から白衣に身を包んだ眼鏡の微イケメン、ハーリックが出てきた。

「さて本日は」

ハーリックの演説が始まった……が、長いので省略させていただく。

そして三時間後。

リリースはステージが終わったのを見計らって放送席で声高々に叫んだ。

「何でここにいるんだよ！ 代理人！」

バキツと軽快な音を立てて放送席の机が割れた。  
リリス、もうちょい手加減してくれ。

「……仕事ですよ、仕事。この科学館の関係者にアナウンサーが病  
欠したから代理してくれって言われたんですよ」

「あ、なんだ、そうなの」

軽っ、すごい形相だったのに即効でいつもの顔に戻った。

「おにーちゃん、じゃあこれで仕事終わりなの？ じゃあいっしょ  
に回らない？」

スズからの提案。代理人は首を横に振った。

「まだ仕事残ってますから、すみません」

そっかー、と残念そうにスズは俯いた。

「帰るのも別々になりそうなので、まあ、ランド村で逢いましょう」  
「うんわかった」

リリスが頷いたとき、タイミング良く(?) 白衣の男性が入って  
きた。

いわずとも、ハーリックである。

突然の大物の登場に固まるリリスとスズに、ハーリックは「ああ」と呟いてからこう言い放った。

「初めまして、【虚偽遣い】のご友人ですか？ 僕はハーリック、【虚偽遣い】の彼氏候補です」

代理人の拳が天才科学者の顔面に吸い込まれていった。

人からの厚意はありがたく受け取りましょう(後書き)

全ては夏休みの宿題が悪いんです

殺人はいけません(前書き)

長らくお待ちしました

## 殺人はいけません

「殺人つていけないことですよね」

「……代理人、何だいきなり……」

「いえ、唐突に思いついたんで。ほら、あのジャックつていうのが以前自分を殺人鬼と称したでしょう」

「あまあ……アタシも人を殺したことはあるけど、殺人はいけないことだろ」

「ところでリリスさん、今まで何人ほど殺しましたか？」

「細かくは覚えてないけど大体千人くらいかな」

「そうですか、私は六十億人くらいですかね」

「嘘だろ」

「さてね」

\*\*\*\*\*

ランド村の村長、ジョック・ハリスワードは久々に夜の道を歩いていた。

散歩、というわけじゃない。件の魔獣騒動について色々村の長として始末があるのだ。

「全く……あのバカ息子め、少しは手伝わんかい！」

小声で叫ぶ。ランド村の夜は早く、皆もう寝付いているからだ。

ジョックは眠たそうに欠伸をし、目をこする。

今日はもう早く帰って寝よう。そう決めて、歩く速度を速めた時、

チリイイインっと、透き通るように綺麗な鈴の音がした。

「……………？ なんじゃ？」

夜遅くに鳴った鈴の音を不思議に思い、音の鳴った方向を見た瞬間。

ジョックの額に小さな穴が開いた。

それは小さな小さな、直径二センチにも満たない穴。

しかし、額に開いた穴はジョックの命を奪うには十分すぎるほど大きな穴だった。

しばしの静寂のあと、ただの肉塊となりはてた元ジョックは静かに地面に倒れた。

\*\*\*\*\*

「やあカズマ、昨日ぶりだね」

「……よお【絶望神】<sup>デスベイヤイ</sup>、出来れば逢いたく無かったよ」

そいつはいつもの格好で、いつもの笑顔で、手に漫画本を持って自分の前に現れた。

「連れないこと言うなよ、トモダチだろう？」

「友達じゃねえよ」

「トモダチだよ、その証拠に君は僕に敬語を使わない」

「……友達じゃない、親友だ」

「シンユウ……やめろよ、照れる」

照れると言いながら、そいつは顔を赤らめない。笑顔から、表情を変えない。

「ところでカズマ、僕今百二十五回目の絶望を味わってるんだ。慰めてくれない？」

「早いな……昨日百二十四回目の絶望を味わったとか言ってなかった？」

「僕は【絶望神】だからね、絶望を味わうのも絶望から立ち直るのも慣れてるのさ」

ついでに絶望を与えるのもねー、っとそいつは全く表情を変えないまま言う。

「ところでああ」

「ところでああ」

そいつと自分は、同時に声を出した。互いに互いを、指差して。

『アンタ誰だ？』

\*\*\*\*\*

代理人、起床。

「……………何だ？ 今の夢……………」

まあ意味不明な夢は置いとくとしよう。もう内容も大半を忘れたし。

寝巻にしたた桃色のシャツを脱ぎ、黄色いシャツを着る。

今日はいつも通り宿の朝食を食おうか、それとも久々に何処か別の食事処に行こうか……………。

しばらく考え、結局いつも通り宿で食べることにした。

「……………？ なんか騒がしいな……………」

二階から降りると、ガヤガヤと騒がしい喧騒が聞こえた。

今は大体午前六時くらいだ、こんな時間から喧騒が聞こえるとは……………珍しいな。

つと、代理人が思いながら外に出ると、めちやくちや人が集まっていた。

「な……なんですかコレ？」

「代理人！」

代理人がうるたえてると、人ごみを掻きわけてリリースがやってきた。

続いてリリットや宿のおばさん、リオとスズがやってきた。

「村長が、殺された！」

「あ、そう」

何だそんなことか、と代理人は欠伸をし、宿に入って行った。

「ちょ……！ 待てよ代理人！ 死んだんだぞ？ 殺人事件だ！」

「だって、そろそろ死ぬと思ってたんですよ、誰かが」

「……は？」

「私のいる世界で私の身近の人物で誰かが死なないことはありえない、時期的にそろそろだと思ってましたよ」

まあ村長が殺されたのは想定外でしたが、と代理人は無表情で言う。

「それに……私は代理人、誰かの代わりの人間です。誰でも無いけど誰にでも成れる、そんな人間です」

代理人の顔は後ろ姿のため見えない。

「私は、私には成れない」

「そんなこと……」

「あります」

リオが絞り出すように言った言葉を遮るように代理人は断言した。

「誰でも、嫌いな人間の真似はしたくないでしょう」

代理人の言葉に一同は押し黙る。

そんな中、リリットが口を開いた。

「じゃあ、僕から依頼します、代理人さん、実は僕村長を殺した犯人探ししようと思ってたんですけど代わりにやってもらえませんか？」

リリットのセリフに、代理人は薄く笑う。

「そうですね、仕事なら仕方ありません。犯人に絶望を味わらせてあげましょう」

「お願いします」

リリットは笑いながら言う。

本心では、村長の仇を討ちたい代理人は見透かしたように。

「あ、ただし報酬はもらいますね」

「ええいいですよ、幾らですか？」

そうですね、と代理人は顎に手を当てる。

「肩たたき券をお願いします」

殺人はいけません(後書き)

長編スタート

真相は闇の中（前書き）

遅れてすみません！

テストだったんです！（言い訳）

## 真相は闇の中

「なあ、代理人」

「なんですか？ リリスさん」

「【虚偽遣い】 っ、何なんだ？」

「分かりません」

「……は？」

「ああでも私の師匠……まあ育て親が初代【虚偽遣い】だったんですが……」

「……今さらっと結構重要なこと言わなかった？」

「【虚偽遣い】ってというのは結局彼の造語ですしね、彼がいなくなつた今、真相は闇の中ですよ」

「……」

「彼が言うには私は生まれながらの【虚偽遣い】らしいですよ、それと【虚偽遣い】は『全ての者に平等であれ』って言った」

「へえ」

「でもそんなの無理でした、人間ってのは誰かを憎まなくては生きていけませんからね」

「……っ」

「だから、私は、私が、大っ嫌いです」

\*\*\*\*\*

勿論。

代理人が村長の仇を討ちたがってるとか嘘である。

自分以外の存在は全て平等に“どうでもいい”と考えてる代理人にとって人一人死ぬことでいちいち悲しんだり嘆いたり怒ったりするはずはなく、

ただ普通にしてただけである。

ただ普通にしてただけで無意識に無作為に無意味に嘘を吐いてしまう。物語を進めてしまう。

### 【虚偽遣い】

虚しい偽りを、遣う者。

「死因は？」

騒がしい喧騒のど真ん中。ようするに村長の死体があった場所。砂色だった地面は赤く染まり、どれだけ村長が血を流したかよくわかる。

親族はここにはいないようだ。おそらく死体のあるほうにいるのだろう。

代理人はひとまず現場検証をしてたこの村の保安官（自警団？）に話を訊いた。

死因は頭部に数mmの穴。

魔力の痕跡と軽く電気を帯びていたことから遠距離狙撃が可能な雷属性の魔法で殺害したと判断。

「ライホウだろうな」

「はい、現存する雷属性の貫通性を持つ魔法であそこまで綺麗に遠距離から頭部に命中させられるのはライホウ以外ありえないでしょう」

そこで言葉を区切り、横目でリリスを見る。

「貴女なら例外ですが……ね」

「おいおい酷いな代理人、アタシを疑ってるのか？」

「人類皆平等。容疑者には貴女も私も入ってますよ」

「自分で自分を容疑者に入れるか？ 普通」

「【虚偽遣い】ですから」

フツと笑って、代理人は動き出した。

それを追ってリリスも動き出す。

「当てでもあるのか？」

「はい、ライホウの最大飛距離はたしか2200m、有効射程は900mほどだったのでその範囲を隅から隅まで探ってみましょう」

「広っ、てかなんでそんなこと知ってたんだよ」

「なに、スズちゃんやリオちゃん、リリットさんは……あんまし当てにならないけどみんなに手伝ってもらえばすぐ終わりますよ」

「スルーですかそうですね」

リリスは呆れたようにため息をこぼす。

「代理人はやっぱミステリアスだよな……もうかれこれ何年もの

付き合いなのにまだ遠くに感じるよ」

「リリースさんが私のこと理解するころには世界が滅んでるでしょうね」

「はっ、何千年後だよ、世界なんてそう簡単に滅びるもんじゃねえだろ」

「……そうですね」

代理人の表情が若干曇る。しかし代理人の後ろにいるリリースはそれに気づけない。

「さ、犯人探し頑張りましょう」

「おう！」

\*\*\*\*\*

「手掛かり無し……か」

もうすっかり日が暮れた時間。広間にあるベンチに座れ込んだリリースが言った。

ちなみに今広間にいるのは代理人とリリースとリリースのみ、スズとリオも手伝っていたのだがもう夜遅いということで帰らせてある。

「これだけ探して何もないうてことは……犯人は殺人に手慣れたるのかな？」

と、リリット。

「多分そうでしょう。でもいくらなんでも痕跡が無さすぎるんですよね……明日は彼を訪ねてみましょうか」

「彼？ ……情報屋か？」

「ええ」

彼なら何か、知ってるかもしれません。

と、代理人がセリフを続けようとしたとき。

チリイイイイイインっと、鈴の音のような澄んだ音がどこから聞こえてきた。

「……？」

しかし、何も起こらない。

突然聞こえた鈴の音に困惑するも、答えは出るはずもなく、今日は解散となった。

たった今、二人目の犠牲者が出たとも知らずに。

どうでもいい(前書き)

テスト勉強しなかった 赤点取っちゃった 母に「パソコン一週間  
禁止」と言われる そして一週間更新ができなかった

すいませんでしたー！

どうでもいい

「なあなあ代理人」

「なんですかリリースさん」

「……だ、代理人って……好きな人とかいるのか？」

「出来ないですよ」

「え？」

「だって全部が全部どうでもいいですし、自分は嫌いですし、世界はもっと嫌いです」

\*\*\*\*\*

「連続殺人事件……ですか……」

ふむ、と代理人は顎に手を当てる。

昨日と今日の境界線　まあ十二時ごろに、二人目の被害者が出た。

被害者の名前はジュリック・ハリスワード、村長の息子である。

死因は村長と同じ、額に穴を開けての死亡。

「……メンドクサっ」

誰にも聞こえないように呟く。

人だかりを抜けて、宿に戻る。

早朝故にまだ朝飯を食ってないのだ。

木製の意外と頑丈なドアを開けて中に入る。

先客がいた。

まず目につくのは髪留めに使われてる巨大な銀色の鈴。

髪の色は黒髪……ではなく、よく見ると濃い緑色のポニーテールに束ねられた長髪。同じ色の瞳。

歳は二十歳くらいだろうか？ 美人……と言うほどでは無いが不細工では決して無い。

着ているものはスーツそっくりの白色のラインが入った黒い服。傍らには縦に細長い鞆が置いてある。

そんな女性のカウンターで女将さんと話し合っていた。

(この村の人じゃないな……旅人か？)

そんな推測をたてて、とりあえずリリットを呼ぼうとした代理人に女将が声をかけた。

「あ、ちょうどよかった。ちょっと来なさい」

「……？」

呼ばれるままにカウンターに近づく。すると女性が振り向き、顔が真正面から見えた。

凜々しい。サムライみたいだ。

「何でしょうか」

「えっと、この人はリンさんって言ってね、旅人らしいんだ、それで一週間ほどここに泊まることになってるんだけどアンタと部屋が隣だから何かあった時面倒見てほしいんだ」

「リン・スズランです」

よろしくおねがいします。とリンは頭を垂れた。

チリン、と鈴が鳴る。

「成程、こちらこそよろしくおねがいします」

代理人もまた、頭を下げた。

【虚偽遣い】と、

【深緑グリーンの斬殺人形アリス】

世界を狂わすことしか出来ない有機物と世界を壊すことしか出来ない無機物が出会った瞬間だった。

しかしこの出会いは二人にとってかなり『どうでもいい』ことであり、物語には何も関係が無い。

唯の偶然であり、唯の必然であり、この先の展開にはなんら関係のない出会いであった。

とりあえず。

「部屋に案内しますよ、リンさん」

「これはご親切にどうも、……しかし……」

ぐくくと代理人のお腹から気の抜ける音が鳴った。

「……朝食を食べましょう、ちょうど私もお腹が空いたところです」  
「……はは、すみません」

代理人は女将におにぎりを注文をすると、リンと向かい合うようにテーブルの一角に座った。

「あ、そういえばまだお名前訊いていませんでした」  
「ああそういえばそうですね、じゃあ私のことは代理人とお呼びください」

「代理人……ですか、……私、アナタに似たナニカを知ってます」  
「ナニカって……」

人間じゃないのかよ、と代理人は苦笑した。

その後、届いたおにぎりを普通に食べた代理人とリンは、普通に部屋へ行き、普通に挨拶して別れ、それぞれの部屋に入った。

そこで、代理人は思い出した。思いついた。

リンは、アイツに似ている。  
あの、元世界最強に。

そして、『彼』に。

「ふう……一休みしたら情報屋のどこでも行くか」

そう呟いて、代理人は床に寝ころんだ。

そしてそのまま、眠りに落ちた。

\*\*\*\*\*

「やあやあカズマ、今日も愛してるよ」

「おいおい【絶望神<sup>デスベイアー</sup>】、私は君のこと嫌いなんだよ」

「おいおいおいおい、そんな冷たいこと言うなよ、絶望しなくなってくる」

「勝手にしてる」

犬ころ一匹いないようなさびれた廃墟に、二人の人間がただずんでいた。

「しかしあれだね、物語のネタバレするのは好きじゃないけど言うておかなきゃならないことがある。カズマ、君、そろそろ死ぬよ」

「はあ？ そんなの当然だろ、ネタバレでもなんでもねーよ？」

ていうか、もともと死んでるようなもんだろ。

「……君は、『彼』を恨んでる？ 君に呪いをかけた『彼』を」  
「……………」



だから、早くこんな夢覚めてくれ。

\*\*\*\*\*

パチリと目を覚ます。  
身体を起こす、ちよつと節々が痛い。

「ふわ……、今何時かなあ……」

詳しい時間が測りにくいのは不便だ。外を見て太陽の位置さえ測ればわかるけどなんとなくそんな気が起きなくてしばらくポーっとする。

「まあ……」

目を瞑る。寝る気は無いけど。

「どうでもいいか」

そうだ、全部が全部、一切合財、どうでもいい。

「嘘だけど」

どうでもいい(後書き)

リンは普通に美人です。ただどこぞの世界最強と美少女の所為で霞  
んで見えるだけです。

## 唇と唇を合わせる行為

「なあ、代理人」

「なんでしょうか」

「代理人って……キスとかしたことあるか？」

「キス……？ ……ああ、あの唇と唇を合わせる行為ですか、そりゃ、何回もしてますよ」

「マジで!？」

「ほら、こうやって上唇と下唇を合わせ……」

「それはキスじゃねえ!」

\*\*\*\*\*

「リリースさーん」

町はずれに位置する代理屋からさらに外れた郊外中の郊外、件の情報屋が住む小屋の近くで代理人はリリースを呼んだ。

すると代理人の目の前の空間がピキッとひび割れ、そこから赤色の魔力が滲み出る。

「呼んだ？ 代理人」

ヒョコッと擬音語が聞こえてくるような感じでその中から赤色の最強、リリース・レッドバードが現れた。

リリースは普段、自分が作った『赤色空間』という亜空間に住んでいる。

完全に魔力で構成されてるので、代理人は入ったことないが、相当豪華で住みやすいところらしい。

「ええ、情報屋に行きますから付いてきてください」

「む、別にいいけどさ、アタシいらなくないか？」

「交渉において暴力というのは時にもっとも有効な手段に成り得るんですよ」

「成程、ようするに情報代を踏み倒すつもりなんだな？ でもアタシはまだ犯罪を犯したくないんだが」

「貴女が存在自体が犯罪みたいなもんでしょう、さあ行きましょう」  
「そう言うところリリースは諦めたようにため息を吐き、『赤色空間』から出てきた。」

いつもの服装だ。

「で、情報屋つてのは何処にいるんだ？」

「あの小屋です」

代理人は少し先にある小屋を指差して言った。

小屋は木製で、手作り感満載の素朴な小屋である。

ノックをする。中から「帰れ」と聞こえたので入る。

「おじやまします」

「おっじゃまー」

「貴様ら……オレは帰れと言ったはずだが」

そんな風にいつもの如くツンデレてくるこの男の名前はリゲル・ブックアート。

黄色と黒が混ざった色の髪と、瞳をもつイケメンである。

まあそのイケメンも無精ひげとダルダルのＴシャツとジーンズという格好の所為で台無しになってるが、これでもこのイケメンは信用できる一人前の情報屋である。

情報屋というのは、その名の通り情報を扱う職業のことで、色々な人に狙われやすい職業である。

「寂しいこと言わないでくださいよりゲルさん、私と貴方の仲ですよっ?」

「そうそう、アタシとも昔殺しあった仲じゃねーか、それに今回は客として来たんだぜ?」

「はあ………本当にお前らは………まあいい、座れ、茶は出さんぞ」

そう言っつてリゲルはオンボロの椅子を二つ小屋の隅から持ってきた。

リリスはそれを一瞬で破壊し、光の速度でリゲル用のソファアに腰掛けた。

代理人はリリスが壊した椅子の破片の中で一番長くて頑丈そうなのを手に取り、リゲルの頭に叩きつけた。

その後リリスに交渉して少しずれてもらい、ソファアに二人仲好く座ったリリスと代理人。

「リゲル、茶」

「リゲルさん、お茶」

「………地獄に堕ちろ」

その後頭頂部にタンコブ、頬に引っかけ傷、鼻から血を流したりゲルが目から塩水を流しながらお茶を運ぶリゲルの姿があった。

「さすがリゲルさん、優しいですね」

「黙れ……それで、用は何だ」

「その前にリゲル、お茶おかわり」  
「……………」

もう逆らうことはやめたらしい。リゲルは黙々とお茶を汲んでリスに差し出した。

「えつとですね……情報がほしいのですよ」

「それは当然だろう。ここは情報屋だぞ？」

「まあそれはそうですね、それでは」

チリイイイイイイイイ

と、鈴の音がかすかに聞こえた。

そう思った、次の瞬間。

バチンつと雷光が響き、リゲルの頭を後ろから貫いた。

そしてそのままの勢いで代理人の眉間に雷光は到達したが、代理人の魔力拒否により弾き消えた。

「　　っ！」

一瞬の内にリリスが反応し、ライホウの射程距離、2200mよりも若干広い2250mを半径とした結界を張る。

ランド村には、ぎりぎり届いていない。これで犯人は、袋のネズミのはずだ。

「行くぞ！ 代理人！」

「はい！」

小屋を出ていく寸前、代理人は振り返った。

リゲルの死体を、肉塊を。

人の死体を見るのは、慣れている。でも、何故だか胸がイラツときた。

「早く！」

リリスの急<sup>せ</sup>かす声がして、代理人は踵を返して駆けだした。

犯人を、捕まえるために。

\*\*\*\*\*

「だーーーー！ くっそ！ 何で見つかんねんだ！」

リリースが叫ぶ。

まあ確かにもう6時間程度探してるのだ、しかもリリースの馬鹿み  
たいに強力な探知魔法を使ってるのに、一向に見つからない。

「犯人は私クラスの魔法耐性が、消去魔法でも使えるんでしょうか  
……？ そうじゃなきゃ……、リリースさんの結界を破れるはずが  
」

その瞬間、代理人は閃く。

リリースの結界の外に逃れる、もう一つの方法。

「ライホウ以上の 遠距離狙撃……」

代理人の呟きに、リリースは顔をしかめる。

「はあ？ そんなもんあるわけないだろ、それこそアタシ並みの魔  
力が……」

「あるんですよ、それが。飛距離だけなら拳銃ライホウを遥かに凌駕する魔  
化学兵器」

## 唇と唇を合わせる行為（後書き）

用語説明

魔化学兵器 魔法と科学が合わさって出来た兵器のこと

達えないヒト(前書き)

テスト週間終わったーーーー!!

## 逢えないヒト

「なあなあ代理人がいた世界ってなんて世界？」

「ふむ、世界自体の名前は知りませんが住んでた星は地球って呼ばれてました」

「星？」

「ああそっか、エステアには宇宙の概念が無かったですね、まあ、詳しく説明すると長くなりますし世界と同じようなモノとでも思ってください」

「ふうん、成程。チキュウね……そのチキュウに代理人の大切な人っているのか？」

「まあ、もう逢えませんがね」

\*\*\*\*\*

## 狙撃銃

ライホウからの強化/派生型として造られたその武器はエステアに於いてまだ一般には知られていない、極秘の武器である。

その正式名称を超遠距離狙撃型雷砲といい、略してエンホウと呼ばれる。

有効射程一キロ、最大飛距離二キロ。現在、この世界で最長の射程を誇る武器である。

「なんで代理人がそんなこと知ってんだよ」

代理屋に向かう道中、リリスがそう話しかけた。

「現在、このエステアにある科学技術のほとんどが私の元居た世界の知識から私が与えたものですよ？ あの天才科学者、ハーリック・ワーカーズさんの功績は全部私が手伝ったものですし」  
「……………」

マジかよ、とリリスは呟いた。

しばらくして代理屋にたどり着いた二人は、通話用の魔術水晶を机の引き出しから出した。

代理人が触ると込められた魔力が露散してしまうのでリリスが手に取り、魔力を込めた。

リリリ……と水晶から音が鳴る。

しばらくすると、水晶に男の顔が浮かんだ。

異様に痩せた頬に、知的な眼鏡、茶色の髪。

「お久しぶりです、ハーリックさん」

『おお！ 【虚偽遣い】じゃないですか、お久しぶりです』

ハーリックは水晶の向こうでお辞儀した。

『ところで何の用ですか？ わざわざ貴女が連絡してくるなんて、初めてのことですね』

「単刀直入に言います、超遠距離狙撃型雷砲 エンホウ、盗まれましたか？」

『ギクツ……………！』

その反応に代理人はため息を吐く。凶星だったらしい。

「……………犯人はわかってますか？」

『それが……………科学博物館で盗まれたってことしか……………』

「博物館……………」

展示してたのか、アレ。

「警備はどうしてたんですか」

『……………全員、殺されてた』

「！」

『眉間を貫かれて……………な』

その言葉で代理人は確信する。犯人は、エンホウを使用していると。

それならば次は盗んだ人の特定、科学博物館に出入りした人、ランド村の村人、全て調査しなければならぬ。

「忙しくなるなあ……………」

代理人はそう呟いて、通話を切るべく水晶に触った。

ぱあんっと魔力が弾け、消える。

水晶を仕舞い、部屋を出る。

とりあえず、一番怪しい人に訊くことにした。  
代理屋を出て、隣の宿屋に入る、そして、とある部屋の前で止ま  
った。

「リンさん」

コンコンッとドアをノックする。

ガチャッと、ドアが開き、中から深緑の髪の毛と、それを留める  
鈴が付いた髪留めが印象的な凛々しい女性　リン・スズランが出  
てくる。

「ちょっと、お話よろしいでしょうか」

\*\*\*\*\*

時は、少し遡る。

「リン？」

リリースが貼った結界内の草原で代理人を抱えながらリリースはオウ  
ム返しのように反復した。

「ええ、つい最近やってきた旅人なんですけど……私はあの人が一番怪しいと考えています」  
「どして?」

ダンツと丘から飛び降りる。舌をかまないように落下中は喋るのを中断した。

トンつと無事着地し、会話が再開する。

「まず、時期がジャストすぎます。不自然なくらい殺人事件と被ってランド村に来ました」

「あー、確かにな」

「まあ確率は5%にも満たないですけどね、それでも他に手掛かりが無い以上後で訊き込みしましょう」

「ああ」

エステアにはろくに法律らしい法律は無いから強行しても大丈夫だろう。

「他に候補っていないのか?」

「うーん、この人は無いだろうってのは大量にいるんですがね……」

「例えば?」

「私、リリスさん、魔法学校の教師以外の人全員です」

「随分多いな……てかアタシも代理人も容疑者かよ」

「ランド村は平和ですからね、戦闘能力を持たない人が殆どです」  
「ら」

「まあ確かにそうだな……、魔法学校の生徒は? あそこはライホウ科もあるぜ?」

「まだ子供でしょう、そんな遠距離からの狙撃なんて首席らしいスズちゃんでも無理ですよ」

「そだな」

\*\*\*\*\*

回想終了。

そんなわけでリンの宿にお邪魔した代理人とリリースは、とりあえず中に入れて貰った。

内装で特に描写することはなかった、それはそうだ、代理人と同じ宿なんだから。

「適当におかけください」

リンはベッドに二人を誘導し、座るように言って自分は椅子に腰かけた。

「それで、訊きたいことは何でしょう」

チリンと鈴が鳴る。

「じゃあ単刀直入に訊きます、貴女、連続殺人事件の犯人ですか？」  
「直球過ぎだろ！」

すぐさまツツコミを入れるリリース。

勿論今のは代理人も正直な答えが返ってくるとは思ってもいない、軽いギャグだ。

しかし、その一言で部屋の空気が変わった。

ギャグによってほのぼのとした空気……ではなく、殺伐とした戦場のような空気に。

「……っ！」

「……これはこれは……」

リリースが息をのみ、代理人が珍しく額に汗を流しながら諦観の笑みをこぼした。

「どつして……」

バリン！ と窓が割れる音。

リンの拳が、窓ガラスを貫いていた。

その手には 破片が一欠けら。

それで、リン・スズランが使用する武器としては充分すぎた。

「どつしてそのことを知っている……！」

腕が振るわれる。

二人は、ただただ本能的にしゃがんでいた。

ピキッとドアが歪んだ。

そこからだんだんと壁が歪んでいき、リンが振った腕の軌跡にそって斬れていく。

その速度はどんどん加速していき、やがて宿の二階、全てが斬れて、ずれた。

強い。それもリリース並みの。

「リリースさん、これはどうやら……」

「ああ、大当たりみたいだな。となると狙撃銃はあの細長い鞆か……」

再びリンの腕が振るわれる。今度は縦。

だがリリースが瞬間的に距離を詰め、リンの腕を取ることので防いだ。

チリンと、鈴が鳴る。

リリースは腕を取ったままの態勢で全力で拳を振るう。

しかしそれは首を傾げるという行為でいとも簡単に避けられ、リンの手刀がリリースの首を襲う。

その手刀は空を切った。リリースがしゃがんだからだ。

ズバン！ とリンの放った手刀の延長線上にある、宿屋の外の木が真っ二つに切れた。

その距離、約50m。

「……おいおい、アタシよりも身体能力高くねえか？」

冷や汗を掻くのは何年ぶりだろう。再び繰り出された、ガラスの破片も持っている方の腕から振るわれた斬撃をかわしながらそう思った。

その時

チリイイイイイイイイイイ

あの音が、響いた。

「え」

割れた窓から走ってきた雷光、その光は無慈悲に、躊躇いもなく、リンの額を貫いた。

数瞬の硬直の後、リンはリリースにもたれかかるように倒れ込んだ。

チリンと、鈴が鳴る。

心音は、聞こえない。

「　　ッ！ 代理人！ 鞆は……！」

「空っぽです。何のために持ち歩いてたんですかね？」

代理人は立てかけてあった細長い鞆を片手でひらひらさせながら

言った。

「くっそ……！ 射程は二キロくらいだよな？」

「はい」

「行くぞ！」

リリースは代理人の首根っこをつかむと、身体を一気に強化、跳ぶ。そして部屋にはリンだけが残った。

しばしの静寂が流れ、唐突に静寂が終わる。

「んっ……っう……」

額に穴を開けながら、リンは平然と立ち上がった。

「痛い……やっぱり頭に穴開くのは痛いですね……一体何なんだっただんでしょう……」

シューウウウウウつとビデオの逆再生みたいに穴が塞がっていく。数秒後、穴は完全に塞がった。

「再生にも時間がかかりますしねえ……しかし、彼女らは何であのことを知ってたんでしょう？ ……まあ、いずれにしろもうここには居られませんね」

落ちてた鞆を拾うと、リンは窓に足掛け呟いた。

「さて、どうやって世界を壊しましょうか」

そして、リンはランド村から去った。

後日滅茶苦茶になった宿屋を見て女将さんが嘆いたのはまた別の話。

血が繋がっていなくても家族は家族（前書き）

解決編です。

詰め込みすぎたかも。

## 血が繋がっていなくても家族は家族

「なあなあ代理人」

「何ですかリリースさん」

「代理人って両親はどういう人だったんだ？」

「……私を産んだだけの人間のことなんて覚えてませんよ。リリースさんもそうでしょう？」

「まあ……な」

「ま、私を育てた人間を親というなら……私の親は」

「……………」

「【虚偽遣い】、でした」

\*\*\*\*\*

スズは13歳である。

そう描写したのは、覚えてるだろうか。

13歳。幼いといえば幼いが、地球でいうと中学生である。

あんな幼言葉を使うほど、幼くない。

「失念してましたよ……」

嘘は、虚偽は自分の領域なのに。  
あまりに似合いすぎてたため、見逃してた。

「で？　なんで大量殺人事件を……？」

幼女に対する優しい言葉づかいではなく、いつもの敬語で、語りかける。

「スズさん」

さらさらと、風がなびく。

ランド村から少し外れた小高い丘に、狙撃銃を持った事件の犯人、スズがいた。

スズは、何も見てないような虚ろな目で代理人を見た。リリースが身構える。

「……【虚偽遣い】の、お兄ちゃん」

もう、幼言葉は無かった。普通の、可愛いだけの声である。

「もう一度訊きます、村長と、……その他大勢を、何故殺したんですか？」

その他大勢カワイソス。

「お兄ちゃん　私ね、ランド村が大好きなんだ」

ゆっくりとした口調で、スズは語りだす。

「私を拾ってくれた村長もジュリックさんも、リリースさんもお兄ちゃんも、みんなみんな、大好きなんだ」

スズは年相応の、可愛らしいが、どこか大人っぽい笑みを見せる。

「でも、ダメなんだ」

途端にシュンとなるスズ、その表情のまま、腰のホルスターからライホウと取り出した。

「殺したくて、しょうがないんだ」

私は

「殺人鬼だから」

パァンと、発砲音が鳴った。

\*\*\*\*\*

## 殺人鬼。

殺し屋とは一味違うそのジョブの特徴は、人殺しが三大欲求と同じくらい生きるのに必要なこと、というところである。

呼吸をするように殺し、飯を食うように殺し、一定の間殺人をしないと発狂するという難儀な種族である。

殺すために生き、生きるために殺す。

スズがランド村に来てから5年、彼女は一度足りとも殺人を犯していない、魔物の討伐でなんとか鬱憤を晴らしている。殺さない理由は、村のみんなのことが好きだから。

それを愛というなら、代理人は愛の化身ということになるが、それは今は関係ない。

今まで我慢してても、どれだけ辛くても、彼女は殺人を犯した。

それはまだ法律が明確に定まってないエステアでも、紛れもない犯罪行為だ。

「さあリリースさん、さっさと事件を解決して、リリースさんに十二時間耐久肩たたきでもやってもらいましょう！」

「おう！」

放たれた雷光は代理人に直撃したが、【魔力拒否】で弾かれる。

リリースが突進する。もはや、相手が殺人鬼だと判ったなら遠慮は無用。

二人が殺人鬼という言葉に驚かなかったのは、もう、一度会ったことがあるからだろう。

リリースが強化魔法で強化された腕で全力全開の拳を振るう。  
スズはそれをかがむことで避け、銃口をリリースに当てた。

「チャージショット」

ピツシャアアアアアアんと今までと桁違いの雷光が轟き、リリースが後ろに吹き飛ぶ。

「ライホウってそんなこともできるのか！」

リリースは空中で嬉しそうに笑い、一回転。着地。

その瞬間、数多の雷光がリリースを貫いた。

「痛てててててててて！」

痛いで済むのはおかしいのだが、ダメージは入っている。

スズはライホウの乱射を継続したまま、もう片方の手でもう一丁のライホウを手を取った。

右手で連射を、左手でチャージショットの準備をしながらリリースに近づいていく。代理人に動きは無い。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん」

右の連射を止め、左の銃口をリリスの後頭部に押し付けたスズが言う。

「お願い。この町から出て行って、お兄ちゃんとお姉ちゃんは殺したくない」

それは、最期通告。

首を横に振れば、即座にリリスの後頭部に強大な一撃が入るだろう。

それまで傍観していた代理人に、リリスとスズが視線を向ける。

代理人は、今までに無い程無表情のまま、口を開いた。

「さて、状況を整理しよう」

日本語で、ぼそりと呟く。

リリス  
人質がいる、スズはライホウを二丁、エンホウを一丁所持、犯人の要求は村からの退去。

戦闘力は、あちらのほうが上。

ふう、とため息を吐く。

どじやら、【虚偽遣い】の出番のようだ。

「スズさん」

呼ぶと、ピクリとスズが反応する。リリスへの警戒は減らないけど。

「貴女の希望通り村から出て行きましょう、だからリリスさんを離してください」

「……嘘でしょ」

わお。ばれてる。

「お兄ちゃんが【虚偽遣い】なのは知ってるよ、そう簡単に信じないよ」

「うわー、私って信用無いんですね」

当たり前だろ。とリリスは心の中で呟く。

「じゃあ……スズさん」

「何？」

「好きです。愛してます。結婚してください」

「嘘でしょ」

「大っ嫌いです。息しないでください。同じ次元に存在しないでください」

「……嘘じゃないでしょ」

「どうしてそう思うんですか？」

「だって、私お兄ちゃんにもお姉ちゃんにも今酷いことしてる」

「いえいえ、そんなことどうでもいい。別にスズさんのことは嫌いじゃないです。嘘だけど」

「じゃあ嫌いじゃない」

「何言ってるんですか、『嘘だけど』が嘘かもしれないですよ？」

「……そんなの、」

「……どうでもいい」「」

声が重なり、代理人がにやりと笑い、スズが顔を引きつらせる。

「……舐めた真似してると、撃つよ？」

「そんな可愛い顔じゃ怖いこと言っても怖くありませんよ？」

「……………」

「それに、リリースさんじゃ人質に成りえませんか」

「…………？」

「…………！」

リリースが僅かに顔をゆがめる。

「どうして？ お姉ちゃんはお兄ちゃんにとって大事な人じゃないの？ いつも一緒じゃない」

「正直言ってもいいです。たまたまリリースさんただけですよ」

ほら、私って最強っていうのが嫌いじゃないですかー、と、日本でいつ今どきの女のような口調で代理人は言う。

「…………嘘だ」

「嘘じゃないです。そこでものは相談なんですが…………一緒に代理屋をやりませんか？」

にっこりとほほ笑みかけながら、代理人は手を差し伸べる。

「代理屋は良いですよ？ 仕事によっては人を殺し放題です」

スズの表情に戸惑いが浮かぶ。迷ってるのだ、代理人の言葉が真が、嘘か。

おそろく

「嘘だし」「本当ですよ」

スズの言葉にかぶせるように代理人は言う。

「さ、決断を」

チリン、とスズの鈴が鳴る。

スズの脚が、一歩動いたのだ。

代理人の甘言に、騙されたのだ。

「まあ、全部、最初から最後まで嘘なんですけどね」

クン、と代理人の手首が外側に曲がる。

カチリと何かが作動する音が代理人の肘から鳴った。

すると袖から一本のナイフが飛び出した。

持つところのほうが高く、刀身が異常に短い小型のナイフ。  
代理人の、武装の一つである。

そのナイフは勢いよく飛んでいき、スズの左手に突き刺さった。

「痛ッ………!」



\*\*\*\*\*

翌日。

村の外れで、手錠を付けたスズが護送用の馬車の前で、見送りに来ていた代理人に話しかけた。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？ 何ですかスズさん」

「昨日の虚偽……本当は幾つ真実があつたの？」

「……言つたでしょう、全部嘘、と」

「嘘だね。まあいいや、次会う時は、本当のこと教えてね？」

「おい！ 出発だ！」

警備兵の声が聞こえ、スズは軽い足取りで馬車に乗り込んだ。

次、ね。これから彼女は、何十年とかけて王都にある懺悔会で自分の罪を償うのだろう。

「……本当に、全部嘘なんだがなあ」

代理人はそう呟き、踵を返して村に戻って行った。

\*\*\*\*\*

「ごめんね？」

王都に向かう途中にある街道で、殺人鬼は目の前の死体に言った。  
死体の額には、小さな穴が開いている。

「私はまだ捕まるわけにはいかないの」  
そう。

「ジャックお兄ちゃんに、会うまでは」  
返り血に塗れた状態のまま、少女は大地を歩いていく。

同じ殺人鬼である、兄を捜して　。

血が繋がっていなくても家族は家族（後書き）

スズ

属性 妹 ロリ 殺人鬼

## 箸より重いものは無い

「よお、代理人。兄貴の肩たたきはとうだった？」

「彼は本当に【世界最弱】なんだなあ、と改めて思いました」

「あー、万が一赤ん坊と本気で喧嘩したら九分九厘負けるほど弱いしな」

「びつくりですよ、彼が私の肩を叩いた瞬間彼の腕から骨の軋む音がしました」

「兄貴はリアルに箸より重いもの……いや、箸でもぎりぎり持てるか……？」

「脆弱の極みですね、流石【世界最弱】」

「ああ、流石アタシの兄貴だぜ」

\*\*\*\*\*

暗い暗い、真っ暗な何処か。

そこに、私？ 俺？ 僕？ ウチ？ 某？ 拙者？ あたい？

は茫然と立っていた。

すると、突如映画のスクリーンのようにパツと四角形の光が目の前に浮かんだ。

傍らには、いつものように漫画本を手に、微笑を浮かべている、

【絶望神】。

「さて、質問だよカズマ」

【絶望神】は、スクリーンを指差し、こう言った。

「こいつをどう思う？」

スクリーンに映し出されたのは青い髪の青年。

「どうでもいい」

「こいつは？」

茶髪の、大きな鈴型の髪留めをした幼女。

「どうでもいい」

「こいつは？」

と、次々と出てくる【絶望神】の質問に、私？ 俺？ 僕？ ウチ？ 某？ 拙者？ あたい？ は「どうでもいい」と答えていく。

「じゃあ、こいつは？」

次に映し出されたのは赤い髪の少女、そこで初めて、私？ 俺？ 僕？ ウチ？ 某？ 拙者？ あたい？ は怪訝そうな表情を見せる。

そして、一言。

「誰だこいつ」

闇が、晴れて行った。

\*\*\*\*\*

「……またこれ系の夢ですか」

何が【絶望神】だ。馬鹿馬鹿しい。

布団から這いずり出て、ピンク色の寝巻を脱ぐ。汗だくだ。

ちなみにここは代理屋だ。宿屋は先日の一件で斬れてしまったので一時的に代理人はこっちに寝泊まりするようになってる。

「あーズボンもびしょ濡れですよ……着替えなきゃ」

と、代理人はズボンも脱ぎ、パンツ一丁になった。パンツの描写？ そんなものはしない。

新しい服を出そうとして辺りを見渡した代理人の目に、あるもの

が映った。

鏡だ。ちょうど代理人の全身を映すのにピッタリな、鏡。

その鏡に、ほぼ全裸の自分の姿を映し、代理人は呟いた。

「ほんと……どっちなんでしょうねえ……」

自嘲気味に笑い、代理人はいそいそと服を着た。

エステアは、もうすぐ冬の季節だ。

\*\*\*\*\*

「よ、お早う代理人」

「もう昼ですけどね」

赤色空間から出てきたリリスに代理人は即座につっこみを入れる。

事実、今は昼飯時だ。

「なあに、よくあることさ。それよりさ、一緒に飯食おうぜ」

「まあよくあることですね、昼飯は今さっき食い終わりました」

「な、何だっ……」

折角早起きしたのに……と頂垂れるリリス。

「昼間に起きるとして早起きは無いでしよう、それより、暇なんて話し相手になつてくれませんか？」

「むう、飯食つてからな」

そう言つて、代理屋から立ち去つた。多分、何処か適当な飯屋にでも行くのだろう。

今、代理人は猛烈に暇である。

仕事はスズの一件以来無く、ただ暇をもてあそぶだけの毎日である。

しょうがない、今日も適当に町をぶらつくか、と一歩踏み出した時。

「あの……」

と、代理人に声をかける人物がいた。

栗色の腰まである髪の毛をうなじのあたりで二つに縛り、冬が近いにも関わらず緑の麦わら帽子のような形をした帽子を被っている女の子。

リオちゃんである。

以前来た時とは違い、服装が長袖長ズボンになり、マフラーを付けている。

「私のペットつて……どうなりました？」

ちなみに。

エステアの季節の移り変わりは相当特殊だ。まあ代理人からすればだが。

年によつて、季節の変わり目が違つのだ。

例えば今年は、春が2ヶ月あり、夏が5ヶ月あり、秋がたった1週間で終わり、残り全てが冬。

つまり、リオの依頼を受けてから、現在約2週間が経っている。

「あー、実は、あの依頼はとうに解決してるんだ」

「ホントですか！？ ニヤー介はどうなったんですか！？」

ペットの名前はニヤー介らしい、知らなかった。

「……実はね、」

さあ語ろつ。

虚実を、虚言を、虚偽を。

全てが嘘で塗り固められた、ものがたり言い訳を。

あますことなく全て、リオに、ぶちまけた。

\*\*\*\*\*

語り終えた後、リオは盛大に泣いていた。

代理人とリリスの命がけとも言える奮闘、悪の組織の悪逆非道な拷問に耐えきったペットの勇ましさを、そして、壮絶なる最期。

もはや英雄譚と言っても過言じゃない大物語に、リオは自然と涙を流していたのである。

「すみません、リオさん、私の力不足故に……貴女のペットを……ニヤー介を死なせてしまって……！」

「いえ！ いいんです！ 代理人さんは何も悪くはありません！ 悪いのは……その銀河団とかいう組織です！」

よし、完ぺきに騙せたようだ。

代理人は心の中でガッツポーズする。

「代理人さん……私、決めました……、私、強くなります！ ニヤ

ー介の飼い主に相応しいくらい強くなってみせます！」

「頑張ってください、私もかげながら応援してますよ」

「はい！ ありがとうございます！」

リオはふかぶかと頭を下げ、勢いよく駆けだした。

もう、リオの姿が見えなくなったことを確認して、代理人は、日本語で呟く。

「嘘だけど」

\*\*\*\*\*

「首尾はどうだ？」

この世界 エステアの何処か。

そこに、四人の男女が集まっていた。

「ばっちし、いつでも行けるよ」

ふりふりのドレスを着た、クリーム色の髪をした女が、青い魔獣に乗りながら言った。

「問題無い」

金髪ツリ目のきつそうな性格をした美女が、手に持ったライホウ

を腰のホルスターに仕舞った。

「……………行きましょう」

突然、立方形の結界が現れたと思ったら、中から頭が光っている大男が姿を現した。

「そうか」

青いコートを羽織った、バイザーのようなサングラスをかけた男が、呟いた。

「それでは、これより……………」

男の後ろで、何かが蠢いた。

魔獣だ。その数は、目算では数え切れないほど多い。

「王都を、襲撃する」

魔獣の咆哮が、轟いた。

著より重いものは無い(後書き)

リオ

属性 唯一無二の普通でまじめなキャラ 純粹 良い子 一般人

動物好き

マジでコイツ以外で生きてる常識的なキャラがいないとかどんだけ

アバウトな説明(前書き)

超展開

どうしてこうなった

まあいいや

## アバウトな説明

「王都ってどんなところ？」

「人口六千五百二十二人、面積は八万五千平方キロメートル、形状は……」

「ちよいまち、何でそんなに詳しいんだよ」

「適当ですもん」

「だろうな」

「ま、すごく広くてすごく人が多いところってだけ知っとけばいいと思いますよ」

\*\*\*\*\*

## 浮遊感。

吹き飛ばされそうなくらいの圧倒的速度に、思わず目の前の赤色を強く抱きしめてしまった。

その数秒後、軽い衝撃と共に移動が終わり、浮遊感は途絶えた。

「着いたぜ、代理人」

若干顔を赤くした【世界最強】は、腕に抱いた【虚偽遣い】に話

しかけた。

赤色とは対称に、若干顔を青くした【虚偽遣い】は言った。

「……久しぶりですね」

王都に、来るのは。

代理人とリリスが王都に来た理由は、まあ、依頼である。

しかしこれは代理屋への依頼ではなく、代理人及びリリスへの、騎士団からの要請である。

『各地。領民に告ぐ、最近王都周辺に魔獣が大量発生されたため、我こそは！』という猛者は至急王都へ来ていただきたい』

という電報が届いたのは昨日の朝。ちょうど暇でしよすがなかった代理人は、リリスを誘って王都にやってきたのだ。

ちなみにリリスの知名度は実はそれほど高くない……というより世間一般からすると死人扱いにされている。

これは昔起きたとある事件が原因なのだが、その話しはまた今度でいいだろう。

「しっかし……」

リリスは目の前の巨大な門を見上げ、言う。

「でかくて固そうな門だな……アタシでも2〜3発でかいの撃ちこまんと壊れ無さそうだな……」

「2〜3で壊れるのはおかしいんですけどね……この門は戦時中も敵から恐れられたくらい頑丈だそうです」

「そりやすげえ」

そんな感じのことを話しながら二人は門へ向かっていく。

赤の髪と、黒の髪。どちらも希少な色故、街行く人や門番に興味深そうな眼で見られたが、なんとか二人は王都に入った。

「……やっぱこの髪目立つな、フードでも被ってくればよかったかもしれん」

「それじゃ王都には入れませんよ……しかも貴女の髪の長さじゃ隠れきりません」

それもそうか、とリリスは納得し、代理人とはぐれないように注意しながら人波を掻きわけて進む。

「はい」

と、代理人は手を差し出す。

「……？ 何？」

「はぐれないためですよ、ほら、早く繋いでください。あ、別に貴女のためじゃないですよ？ はぐれたらめんどくさいだけです」

リリスは一瞬キョトンとしたあと、

「ははっ！」

笑顔になり、代理人と手をつないだ。

その顔は、若干赤かった。

人が多い所為だ、と無理やり自分に、納得させた。

\*\*\*\*\*

「……で、代理人。目的地はどこだ？」  
「えーと、この辺りの酒屋を集会所にしてるらしいですが……とあれですかね？」

代理人が指差した先には、割と小綺麗な感じで、『G O D C O F F E E』とエステア語で看板に書かれている店。

「ゴッドコーヒー……珈琲が名物ですかね？」

「まあそつなんじゃない？ 店名にしてるくらいなんだから」

会話しつつ、店に入る。

その瞬間に集中する視線。視線。視線。

奇妙な髪の色をした美形が二人同時に入ってくれば、自然とそうなるだろう。

しかもここは、これから魔獣キョウシツテビと戦うために集まった、猛者の集まり。

女子供が何しに来た、という反応もあるだろう。

しかし、もう奇妙な目線には慣れっこの二人はそんなもの意に介さず、一直線にカウンター席へ向かった。

「すみません、珈琲一杯」

「す、すまねえが家の店は珈琲やってねえ」

カウンターにいる亭主っぽいおっさんが皿を拭きながら答える。

「なぬ、店名が『GOD COFFEE』のくせに？」

「はい」

「じゃあ……おススメを一つお願いしま」

「おいてめえらあ！」

ガァン！ とカウンターが殴られる。

うわ、なんつーテンプレな……、と呟きながら、代理人は殴った人物を見る。

禿げ、大男、マッチョ。雑魚悪役、かませ犬、そういった奴らの代名詞と呼べるものを全て持ち合わせた男が、青筋を浮かせてそこ

にいた。

「い！」

そして、吹き飛ばす。

セリフも、言わせないまま。

「黙れ息臭い」

拳を振るった赤色は、殴った手をハンカチでよくふき取ると、そこからへんに投げ捨てた。

男は、壁を突き抜けて、街の大通りにまで吹き飛んでいった様子である。

本当に、かませ犬だったな。

「マスター」

代理人は何事もなかったかのようにカウンターにいるおっさんに向き直り、言う。

「なら、ミルクならありますか？」

おっさんは、引きつった笑みを浮かべながらも、コップにミルク一杯注ぎ、代理人に渡した。

「どうも、リリースさんはどうします？」

「ん、アタシはいいや。だって……」

パリン、とガラスが割れる音がした。

代理人の目の前に置かれた、コップが割れたのだ。

「毒入り……だろ？」

リリスの発言に、場が凍る。

「……どうして……」

「匂い」

即答し、拳を振り上げたリリス。

それと同時に、店内の一角にいた黒いローブを着た女が、呟いた。

「メテオ・プロミネンス」

一粒の火の粉が、宙を舞った。

その粉は、ヒラヒラと舞い上がり、店の天井に辿り着いた瞬間。

爆発した。

目もくらむほどの膨大な光量と、熱量が店を蹂躪する。

爆発は瞬く間に広がって行き、代理人に当たった瞬間、音を立てて露散した。



しかし、止められる。

幾重にも重なった結界が、リリスの行く手を阻んでいた。

「な……！？」

ローブの女が、フードを外す。

その顔には見覚えがあった。

クリーム色の、ふわふわした髪。くりくりした大きな瞳。

「ふわふわフリフリワンピースキチガイ女！」

代理人が叫ぶ。

女は、あの青い札を取り出した。

「誰がふわふわフリフリワンピースキチガイ女よ！」

それだけ言って、女は消えた。

何時の間にか、カウンターのおっさんも消えていた。

「……何だよ、これ……」

リリスが呟く。

後に残ったのは、死体と、嘔吐きと、最強だけ。

壁際の人たちは、とつくに逃げてる。

「……どうやら敵は、魔獣だけじゃないみたいですね」

代理人が呟く。

あの、青い殺人鬼も、敵なのだろう。

「何事だ！」

入口から騎士団が入ってきた。

今更何しに来た。遅いんだよ。

代理人は、そう、心の中で呟いた。

アバウトな説明（後書き）

再び長編スタート

誰もが持つ希望（前書き）

一か月ぶり……  
誠にすいません

## 誰もが持つ希望

「代理人つてさ、この世界に来てとりあえず何をしたん？」

「え、そりゃ……かめはめ波の練習とか……」

「かめはめ波？」

「いや、何でもないです。そうですね……まず衣食住の確保を……」

「かめはめ波？」

「いやだから……」

「かめはめ波？」

「……」

「かめはめ波？」

「……にやにやしないでください、しょうがないじゃないですか、異世界なんて来たら心が躍りますよ！もしかしたらかと思っっちゃうじゃないですか！」

\*\*\*\*\*

その後、遅れてやってきた騎士に事情を説明すると、とりあえず、ということまで王都のそれなりに豪華な部類に入る宿屋で待機との指示を受けた。

今回のことで、騎士や王さまたちは大騒ぎだそうだ。それはそうだろう。ただ、魔獣との戦いのために集めた傭兵たち

が、人間の裏切りによって壊滅させられたんだから。

しかしそれは代理人やリリスにとってまるで関係ないことで、いや、関係無くもないが、二人は戦うために呼ばれただけ、つまり、これからどうするかが決まるまではやることもなく、暇なだけなのだ。

「フーことで適当に王都周ってくるな」

「迷子になるフラグですねわかります。ですが止めません、いつてらっしゃい」

赤色の髪、赤色のコート、赤色のシャツ、赤色のショートパンツに身を包んだ赤一色の美女　リリスは代理人のセリフに若干クエスチョンマークを浮かべるが、深く考えずに「いつてきます」と言っつて宿屋を出た。

突如に浴びる視線。もう慣れてるため、なんとも思わないがこの髪色になって初めて街に出た時は顔も真っ赤にしてたなー、と過去の回想をしつつ、街並みを進む。

（しかし……ほんとでかいなあ……ランド村の数倍はありやがる）

そんなことを考えながら、特に目的も無くうろついていると、すごいところを発見した。

「おいおい、なんだこりゃあ……」

斬れてる。宿屋っぽい住宅が、文字通り真っ二つに斬れていた。

よく見ると、この辺一帯の建物や道路が全て斬れている。

なにかあったのだろうか。

「……………」

こんなことができそうな人物を一人、リリスは知っているが、そうだったとしてもどうしようもないので、さっさと別の場所に行くことにした。

「……………ん？」

リリスの視界の端に、何かをとらえた。

「人……………間……………？」

地面に入ってる切れ込み、その一つから人間のものらしき脚が飛び出していた。

\*\*\*\*\*

「いやー、助かったぜ、えーと……………」

「リリスだ」

「リリス。いやはいいい名前だ、結婚してください」  
「断る」

金髪碧眼の美少年。

それがリリスの助けた男(?)の第一印象だった。

先述のように、金髪碧眼。男か女かまるでわからないくらいの中性的な顔立ち。

シヨタとロリとお兄さんとお姉さんのちょうど中間に位置するよ  
うな絶妙な体格、どこかの貴族かと疑いたくなるくらい優しそうな  
笑みを浮かべてるのに、態度はすごく不遜、おまけに言葉づかいも  
悪い、そんな矛盾を体現したような存在。

全部が全部、代理人と同一だった。

ていうか、金髪碧眼って部分と物腰以外、全部代理人と一緒に  
た。

「えーと、こつこの何て言うんだっけ……そうだ、ドッペルゲン  
ガーだ」

「どつぺるげんがー？」

「いや、こつこの話」

そつかー、と金髪のその男 女？ はコップに注がれた残った  
水を飲み干した。

現在地、大衆食堂。

この金髪があんな切れ込みに落ちてた理由は、空腹らしい。

あまりにも腹が空きすぎて、倒れた拍子に落ちた、とのことだ。

「しっかしここまで似てる つうか同一な顔した人間っているも  
んなんだねえ……。と、そつこいやあ名前訊いてなかったな」

「ん？ ああ、オレの名前か……。んー、【真偽遣い】……。とでも名  
乗っておこつ」

「【真偽遣い】……」

「他にも【武器遣い】やら【無限武装】とかのあだ名……つつか通り名はあるけどそれが一番馴染み深いしな」

「ふーん」

「……あんまし驚かないんだな、もしかして……こっちの人？ 通り名は？」

「……【世界最強】」

【真偽遣い】が噴き出した。水を。

「ま、まさかの倒置法……」

「は？」

「いや、なんでもない。しかし、本当に実在したんだな……【世界最強】、もとい【血染めの赤】」

「……懐かしい名前だな、あ、この髪は別に血で染まったわけじゃないぞ？」

「いや、それはそうだろ」

なんせ、こんなに綺麗なんだから。

と、口説くような口調で言った【真偽遣い】には、拳という洗礼が待っていた。

「良いことを教えてやるう、アタシはもう好きやつがいる」

「ほう、寝取りとは……燃えてくる展開だな」

ズツキヤーン、とものすごい音を立てて【真偽遣い】は吹き飛んでいった。

店の扉を壊してしまったが、まあなんとかなるだろう。

「痛くて……流石に強いな……」

「ほう……手加減したとはいえ常人なら余裕で気絶するようなアタシの拳を受けて痛いって済むとは……できるな？」

「まあ、それなりにね」

そうやって【真偽遣い】は、埃を払いながらまた店内に入り、リスの前に座った。

その時だった。

「あれ？ リリスさんじゃないですか」

代理人が、現れた。

【虚偽遣い】と、【真偽遣い】。

虚実と真実を司る二人が出会った瞬間だった。

\*\*\*\*\*

「……はじめまして、【虚偽遣い】といます」

「よろしく、オレは【真偽遣い】、敬語はいらんぜ」

「いえ、敬語は抜けません、いえ、抜きません……いやあ、それに

しても」

「ああ、オレたち、仲良くなれそうだな」

「いえ、仲良くなれそうもないです」

「同族嫌悪か？」

「いえ、ただの嘘です」

「嘘だろ」

「嘘ですね」

「嘘はいかんよ嘘は」

「そうですね、以後からも気をつけません。あ、そこのお姉さん、この日替わり定食つてやつお願いします」

「かしこまりましたー」

そこで代理人は一息つき、水を口に含む。

そして再度、自分そっくりの人間へと喋りだした。

「しかし驚きましたね、まさかここまでそっくりな人間がいるとは

……」

「そっくりか……その言葉はちよいと違うな、どちらかと言つと…

…鏡？」

「線対象ですか」

「点対象じゃね？」

「スタート地点から真逆に進んだらお互い同じ場所に辿り着いたってことですね」

「ああ、真実と虚実、正反対のようであるで同一なそれにオレ達はよく似ている」

「そうですね、では、私たちの友情を記念して、お互いにあだ名を付けあいませんか？」

「ほう、それはいいアイデアだ」

「ではまず私から……そうですね……【終着地点】なんてどうです

か？ アナタの特徴をよく表してると思っんですが」

「へえ……流石点対象、判ってやがる。じゃあオレは……【余剰部品】なんてどうだ？」

「うっわぁ……どうしたらそんな物語の核心を付けるんですか……ネタバレしすぎですよ、読者サービスですか？」

「日替わり定食お持ちしましたー」

「あ、はい、ありがとうございます」

麦飯に焼き魚、黒い味噌汁に何かの肉が入ったものが運ばれてきた。

それを代理人は自分の前に置き、箸を割って食べ始めた。

「そういえばさ、【余剰部品】、お前とリリスってどんな関係なんだ？」

「んー？ 友達以下恋人以上ですね」

「随分とあやふやな関係なんだな」

「私の好きな言葉ベスト3は『あやふや』『有耶無耶』『矛盾』『曖昧』です」

「4つじゃねえか」

「気のせいです」

「そうか、気のせいか」

「はい、木の所為です」

「木の所為ならしょうがない」

はっはっは、と笑いあうそっくりな美形二人。  
なんとというか、カオスである。

「あれ、リリスさん。さっきから喋ってませんが具合でも悪いんですか？」

「え、いや、その、なんていうか、……仲、良いんだな」

その言葉に金髪と黒髪は顔を見合わせ、同時に言う。

「誰がこんなやつと」

「息ピッタリだなヲイ」

ていうか声優も一緒っばいから声が被ってもあんましハモりっばくない。

「声優？」

「おいおい【終着地点】、メタ発言は自重してくれませんか？」

「あ、すまん」

誰もが持つ希望（後書き）

中途半端ですいません





…… 2週間ほど前に殺しあつた女とほぼ同じ容姿と名前だった。

「あー、それなら…… 「知りませんね…… 聞いたこと無いです」 ちよ、代理人!？」

代理人のシレつとした態度に、リリースは狼狽し、【真偽遣い】は薄く笑う。

「…… お前らつてどこから来た？」

「…… ランド村ですね」

「ランド村か…… うん、次はその辺を重点的に調べるかな」

そう言つて【真偽遣い】は席を立つた。

「またな（・・・）【余剰部品】、リリース。…… あ、リリース、このご恩は四日と四時間四十四分四十三秒まで忘れない」

「さようなら（・・・）【終着地点】、二度と合わないことを願つてます」

「じゃあな【真偽遣い】、…… つてなんでそんな中途半端な時間なんだよ。それにそれこそ嘘だろ」

「今は嘘でもいずれ真実に変えてみせる。それが【真偽遣い】だよ」

そう、決め台詞のように言つて、【真偽遣い】は店を出て行つた。

代理人は日替わりの昼食を食べ終わると、ハンカチで口元を拭つた。

「なあ、代理人」

「ん？ なんですすかりリスさん」

「なんであんな嘘吐いたんだ？ いや、代理人が【虚偽遣い】なの

は知ってるけど……」  
「いつもの癖ですよ、私だって嘘を吐きたくて吐いてるわけじゃないんです」

【虚偽遣い】の特性の一つ。  
フルオートマッチクウォルス  
全自動嘘吐き人間

「あの殺人鬼のように、呼吸するように嘘を吐き、飯を食うように嘘を吐き、さながら三大欲求の一つかのように嘘を吐く」

それが、【虚偽遣い】です。

どこか寂しげな表情をしながら、存在自体が虚実な人間まがいは、言った。

\*\*\*\*\*

「さあさあ実に二話ぶりの出番だ、よって僕のテンションはフルマックス！ ども〜【絶望神】と書いてディスプレイカーです」

そいつは、【絶望神】は、異常なほどに高いテンションの声と、メタ発言をしながらいつもの様に変わらずに替わらずに、薄い笑顔と漫画本を片手にブリッジをしていた。

……いや、ブリッジは初めてかもしれない。確かに今のこいつのテンションは高いのだろう。

「なあなあなあなあなあ、カズマ、片手が漫画で塞がってるのにブリッジできる僕って結構すごいと思うんだがどうだい？」

「……お前の夢を見るようになってから結構経つけどそこまでテンション高いのは初めてだな……どうしたんだ？」

「おうおうよくぞ聞いてくれたカズマ、なんとだな、あの【真偽遣い】こと【終着地点】が【虚偽遣い】と会合を果たしたんだぜ？

もうテンション上がるしかねーよ」

「ふうん、単に顔が同じだけなのに……いや、あらゆる意味で正反對 点対象だったが、そんなに重要な人物か？」

「ああ！ なんせ【創作者】<sup>メイカー</sup>のお墨付き、アードお気に入りだぜ？ 期待大！ 期待だい！」

【絶望神】はブリッジを解き、ジヨジヨ立ちを決めながら言った。

テンション高すぎて、普段との違いに違和感ばりばりだ。

「おっと、もうタイムアップかい？ 本当に君の眠りは浅いね、何をそんなに怖がっているんだい？」

「さあ？ ただ単にアンタと話すのが嫌なだけかもよ？」

「それはひどいな、僕は君のことを愛してるというのに」

「私はアンタのこと嫌いですよ」

気づくと、さっきまで真っ暗だった世界が白く染まってきている。

夢が、覚めるのか。

「嫌いかあ……」

消えゆく世界で、【絶望神】は静かに呟いた。

「まあ、無関心よかマシか」

夢が、覚めた。

\*\*\*\*\*

「……………」

新キャラ登場。【創作者】。メイカー。

誰だよそいつ。

そんなことを思いながら、代理人、起床。

「まあ、どうでもいいか」



「えーと、それでなんでしたっけ」

「たくつ、今日王様とか騎士とかから重大な発表が午前にあるらしいから早起きしろって昨日言ってたじゃねえか」

「へえ……でも確かその発表って午後かららしいですよ」

代理人は部屋の片隅に置いてあったチラシを見て言った。

このあとの赤色の暴走は、割愛させてもらおう。

そしてその後、擦り傷やタンコブを幾つか孕んだ代理人と、それを付けた赤色は雑談を交えながら朝食をとり、昨日だけでは回りきれなかった首都を探索しようと、外に出た瞬間。

「これは……！」

「……っ、おやおや」

特徴的な青い毛並みと、鋭い牙や鋭い爪が剥き出しになっている異質な生物。

魔獣と、エンカウントした。

「ガルルウルルルウル！」

「うっさい」

「ギャン！」

犬のような鳴き声をしながら魔獣は逃げて行った。

リリスが少し魔力を放出し、威嚇したのである。

「しっかしどうなってんだこれ？ 街中に魔獣なんて……」  
「……どうやら一匹だけでは無いようですね」

辺りを見渡すと、うじゃうじゃと魔獣が街に侵入していた。  
騎士が数人、対応しているがとても戦力が足りてない。

「警報すらなっていないとは……見張りは何やってるんですか？」  
「まさか、転移魔法か……？ 王都内にいきなり大量の魔獣を送り込む……そうだとしたらかなり高位な魔法使いが相手にはいるってことか？」

思い浮かんだのはあのふわふわフリフリワンピースキチガイ女とハゲ男、あいつらは結構な魔力量を誇っていた。  
おそらく、転移魔法の使い手はあの二人のどっちかだろう。

「まー他に仲間がいたら話は別だけどね」  
「そうですね。それより、どうします？ 少年漫画の主人公ならここで人々を守るために行動すると思っんですけど残念ながら私は少女漫画派なんで助けられないという選択肢もあります……」

そこまで言って、突然ウウウウウウウウウウウと警報が鳴った。

まったく、対応が遅すぎだ。

「リリスさんは少年漫画派ですよね？」

にやにやと笑いながら、代理人はリリスを見る。

リリスはその美しい赤髪を手で掻きあげ、豪快に、大きく、にんやりと、笑った。

「ああ　この世界最強の魔法使い、リリス・レッドバードは少年漫画を全力で応援しつつ、常に少年漫画の主人公で在りたいと思ってるさ」

「かあつくいいー」

なんつーか、イケメンすぎる。

もう主人公リリスで良い気がしてきた代理人であった。

戦闘狂って怖いね(前書き)

はいはい二カ月ぶり二カ月ぶり

亀更新にもほどがありますね、ええ

すいませんでしたあああああ！

## 戦闘狂って怖いね

「リリースさんって戦闘狂ですよバトルジャンキーね」

「ん？ まあそうだな、一応戦闘に特化されて造られてるからな、多少そういうところあるかもな」

「多少……ですか」

「なんだその眼は」

「いえ別に」

\*\*\*\*\*

「ガルルアアアアアア！」

「きゃー！」

響く女性の声。魔獣が高い唸り声を上げて襲いかかってくる。

女性は幼い我が子を抱き、刹那に降り注ぐであろう激痛、あるいは死に目を瞑る。

しかし、激痛も、死も、襲ってこなかった。

おそろおそろ目を開けると、そこに見えたのは、赤。

その赤色はとても綺麗で、麗美で、思わず見惚れてしまうほどに艶やかで。

とても危険な、色だった。

「大丈夫か？」

その赤色　リリス・レッドバードは、魔獣を一撃で殺した後、ニヒルな笑みを浮かべて言った。

「は、はい……」

それを聞いて赤色は、安心したような笑みを浮かべ、一瞬で去った。

子を抱いた女性は、あまりの出来事にしばらく茫然としていた。

「キリがねー！」

赤色の髪が揺らぐ度に、魔獣が一匹二匹と減っていく。

着々と魔獣の数を減らしているリリスだが、一向に数が減ってる様子が無い。

一体どれだけの数の魔獣がこの王都に送り込まれたのだろうか。

「ん？ ……あでー！」

突然、何か壁のようなものにぶつかつた。

「つゝ、何だ？ 結界？」

よく見ると、青白い薄い壁に囲まれていた。

「いや、これは 転移 ？」

その結論に達した瞬間、リリスは王都から消え去つた。

\*\*\*\*\*

その頃、代理人は『避難所』と銘打たれた王都の一角に居た。

体育館ほどの広さの空間に、現在百人ほどの戦えない人たち  
女子供、けが人が集まつてる。

入口は騎士に囲まれて守られてるため、一応安全といつていいだ  
ろう。

ここに居る人達を見回すと、皆不安そうな顔つきをしている。

当然だろう、こんな状況で不安になる理由がわからないほど、代  
理人は壊れていない、狂つてもいない。

不安には、ならないが。

安心も、していない。

リリースは世界最強だが、無敵ではない。

最強が何時だって勝てるとは限らない、状況によっては負けることだってある。

無敵の生物なんて、【世界最弱】である、リリースただけだ。

っと、そこまで考えたところで、くあっとあくびを漏らした代理人が、突然青白い壁に囲まれた。

それが結界だと気づく前に、代理人の視界はブレた。

そして、代理人の姿は避難所から消え去った。

偶然にも、それを目撃したのは、一人もいなかった。

「うーん、新しい発見ですね」

代理人には魔法は効かないが、空間を対象にした転移は効くのか。

また一つ、賢くなった。

「それはそうとして……スイーツ（笑）さん」

「誰ッがスイーツ（笑）だゴラァ！」

若干、というかなんかキャラが崩れてるふわふわフリフリワンピースキチガイ女もといスイーツ（笑）を軽く無視し、代理人は言葉を続ける。

「バトル展開ですか？」

現在地は かなり広い草原だ。

地平線の向こうに王都が見えるため、そこまで遠くの場所に転移させられたわけでも無いらしい。

「こほん……ええそうよ、そして私の名前はスイーツ（笑）なんかじゃなくてリリシャンっていう可愛い名前があるのよ」

そう言ってクリーム色の髪をしてワンピースを着た女性 リリシャンはピンク色の……子供向けアニメの魔法少女が持つような杖を取りだした。

「……………」

短めの柄の先っぽにハートが付いてて、そこから左右に天使の翼っぽいのが生えてる、ものすごくコメントに困る杖だった。

「ふふん、このまじかる ステッキの餌食にしてやるわ」  
「……………」

壮絶だった。

まさかここまで壮絶な性格だとは代理人も予想できなかった。

鳥肌が立ってきたが、我慢我慢……絞り出すような声で、代理人は言う。

「……何故わざわざ私と……？」

「あの王都に今いる戦えるやつの中で魔獣には手に負えそうもないやつがアンタ達だけだったからだよ」

アンタ達、つまりリリスも何処かに飛ばされたというわけか。

うーん、まあいいか。

「まあ……いいですよ、やってやりましょう。私は、貴女に初めて会ったときからずっと貴女を殺したいと思ってました」

「へえ……そんな風に思われるようなことした覚えは無いけど……行くよ」

チャキッと、リリシャンはピンク色の杖　まじかる　ステッキを構える。

「ファイアーアロー！」

杖の先から炎の矢が放たれ、代理人に真っ直ぐ向かっていった。

しかし、代理人に当たった瞬間に露散した。

「あり？」

「ああ、私には魔力耐性がありますから、上級魔法でも私を傷つけることはできません」

「はあ？　そんなの反則じゃない……いや」

リリシャンは何かを思い出すような仕草をする。

「アンタ……【虚偽遣い】って名乗ってんでしょ？　つまり、嘘吐きじゃない」

「おやおや、低俗な嘘吐きなんかと一緒にしないでください、私は由緒正しき、【虚偽遣い】ですよ」

「そんなのどうでもいいよ！　ようするにどうせ嘘なんでしょ？　魔力耐性つてのもよお！」

再び魔力を集め始めるリリシャン、まじかる　ステッキの先っぼのハートがくるくる回り始めた。

「火よ、燃えろ燃えろ燃えろ、辿を衝き、血を焼け、髪を溶かせ  
ラ・ディガ・ブレイズ　プロミネンス　！」

代理人の頭上に小さな火の粉が現れ、それがリリシャンの言葉とともに、爆破した。

ネタとは無くなるもの（前書き）

テストオワタ

例のごとく二つの意味で

ネタとは無くなるもの

「うーん、困りましたね」

「どうした？ 代理人」

「ネタ切れです」

「は？」

\*\*\*\*\*

魔法は大きく分けて五段階に強さを表現できる。

一番弱い、下級魔法。

二番目の、中級魔法。

真ん中、上級魔法。

上から二番目、古代魔法。

そして最強、神聖魔法。

下級は言わば魔力を少し持つてるだけで行使出来るようなもので、  
中級は魔法学校に通うか、それなりに高額の本を買うことで取得  
でき、

上級は魔法学校の先生になれるほどの魔力があれば可能で、

古代は特殊な才能を持つ者のみがいこなせる。

神聖に至っては、本来神が魔力じゃなく神力を使って行使するよ  
うな魔法で、それを人間が魔力で使おうとすると、なんとあの世界  
最強、リリス・レッドバードの魔力の五百分の一も消費するのだ。

そしてたった今代理人に打ち込まれた大爆発の魔法は、中の上と  
いったところ。

代理人の体質の敵では無かった。

パン。と、風船が割れるような音が響き、大爆発による火も、  
音も、熱も、風も、全て消え去った。

まるでナニかに、拒否されるように。

「んな……！」

リリシヤンが驚きの声をあげる。

「……この程度の威力じゃ私の魔力耐性は打ち破れませんよ？」

「……っ」

ギリツとリリシヤンは歯で唇を噛む。

自分が撃つたのは中級魔法の中でも最強クラスの威力を誇る魔法  
だ。

魔力耐性が嘘だったとしても、嘘じゃ無かったとしても、こいつ  
には何か魔法を打ち消す、又は弱めるナニカがある……！！

「もし貴女がこの程度の威力の魔法しか撃てないのなら諦めて帰った方がいいですよ？」

「舐めるな！」

ゴウツとリリシヤンの魔力が膨れ上がる。

さっきの魔法とは、比べ物にならないほどの魔力量だ。

「私は元【三愚人】の一人、【鈴音リリシヤンの魔女】！ “神聖”の領域に辿り着いた一人なのよ！」

……………。

知らんがな。

「【三愚人】、【鈴音リリシヤンの魔女】、“神聖”の領域……………知らない単語ばっかですねえ」

代理人のセリフにムカツとしたのか、さらに魔力が膨れ上がる。

「束縛の鎖、戒律の鎖、自由の鎖、縛堂の鎖、悲哀の鎖、鬼姫の鎖、天界の鎖」

リリシヤンの詠唱が始まる。

それと同時に纏ってた魔力がさらに膨れ上がる。

「罪悪の扉、欠陥の扉、常識の扉、異世の扉」

異世、という言葉に代理人がピクリと反応する。

しかしリリシヤンはそんなこと意に止めず、詠唱を続ける。

「断罪の、斧」

ジャララララララララ！ と大仰な音をたて、幾千、幾万の鎖が何かに巻きつくような形状で突如空中に現れた。

そして、まるで何処かの教会にでもありそうな煌びやかな扉が四つ、現れ、開いた。

「派手な魔法ですねぇ……」

眩き、啞然として空を見上げる。

巨大な、それでいて煌びやかな。

まるで神の武器のような いや、事実そうなのだろう。

神聖魔法。

神の領域に一步踏み出した者のみが見える最強の魔法。

白銀に輝く 幾重にも鎖で縛られた大斧がリリシヤンの掲げた手の先に顕現していた。

「《神聖魔法其の壱 ジャッジメント 断罪者》」

リリシヤンの声に、何故かエコーがかかる。

「あなたの魔法耐性なんてものじゃ 到底防ぎきれない代物だよ  
！」

リリシャンが腕を振り下ろすと同時に、斧が振り下ろされる。

白銀の光を放ちながら代理人の命を潰し消そうとその大きな刀身からは想像できないほどの速度で代理人に迫る。

代理人はそんな光景を見ながらも、そつと、呟いた。

「スイマセン、私、嘔吐していました」

パァン、と風船が割れるような音が鳴り、全てが消えた。

斧も、鎖も、扉も、全て、根こそぎ、消えていった。

まるで何かに、ナニかに、拒否されるかのように。

「……………え」

リリシャンの口から漏れ出た言葉はそれだけだった。

代理人は左手で自分の右の肘に触れ、捻る。

すると、カチッと何かの作動音が鳴り、袖から一本のナイフが飛び出た。

小型だが、人の喉笛を引き裂いて殺すくらいなら出来る、無骨なナイフだ。

「ひっ……ぐう……！」

代理人の蹴りがリリシヤンの鳩尾に決まった。

茫然と、無防備に突っ立ってたりリシヤンは容易に倒れ、転び、その上に代理人は馬乗りになって首にナイフを突き付けた。

「魔力耐性なんて私は持つてませんよ、私が持つてるのは『魔力拒否』、ありとあらゆる魔力で構成されてるモノの存在自体を拒否する能力です」

リリシヤンの瞳が驚き一色に塗りつぶされる。

代理人はそんな彼女に頬笑みを返し、せめて速やかに、苦しませずに殺してあげようと手に力を込めた、

瞬間。

「っ

！」

本能に身を任せて全身全霊、自分に持てる精一杯の力を込めて横に跳んだ。

右に跳んだのか、左に跳んだのかも分からなかった。

頭に鳴り響く警告音。  
間違いない、間違い無く、この何度も何度も経験してきた感覚は  
正しく

死の、警告。

「はっ……は……」

息を整えつつ自分の元居た場所、リリシヤンを見る。

刀が、突き刺さっていた。

それも一本じゃ無く、魔力で構成された複数の銀色の刃に、絶大な存在感を放つ一本の青い刀。

そしてその上に片足で立つ青いコートを身にまとう、殺人鬼。

「なんだ」

殺人鬼は笑う。嗤う。

世界すら殺せるんじゃないかと錯覚させるくらい、獰猛な笑みだ。

そしてその笑みは同時に、世界を否定するような冷たい笑みだった。

「二人一緒に殺せると思ったんだがな、思ったより 強かったんだな」

なあ？ 【虚偽遣い】。

そう言ってて代理人を見る殺人鬼<sup>ジャック</sup>。

代理人は、曖昧に笑って、「過大評価ですよ……」と言っしかな  
かった。

代理人は物理攻撃を持つ相手との相性は最悪なのである。

「やっべ……」

呟く。

代理人、大ピンチである。

ネタとは無くなるもの（後書き）

今気付いたけどこの小説名前の最初の文字が『リ』のやつ多い。

リリス、リリット、リリシヤン、リン、リオ

5人もいるよ

人を愛するということ（前書き）

もういっかげつにいかいのころしんってたぐつけたほづがいき  
がしてきた

くそ！ なんて時代だ！

## 人を愛するということ

「リリースさんって誰かを愛したことがありますか？」

「ん？ 現在進行形でいるぜ？」

「へえ、ふうん、若いつていいですね」

「代理人も充分若いじゃねえかよ」

「実は私見た目は大人、中身は老人なんですよ」

「嘘吐け」

「嘘ですよ」

「代理人は誰かを愛したことがあるのか？」

「ありますよ」

「嘘？」

「嘘です」

\*\*\*\*\*

エステアの隅の隅のまたまた隅。  
そこに人に忘れ去られた村がある。

名をロクロウ村というその廃村は、二人の殺人鬼によって、殺された。

木っ端微塵に、圧倒的に、欠片の容赦もなく、欠片の情けも無く、同情の余地も無く、殺され、殺され、最期の最後まで殺された。

村を殺した二人の殺人鬼の名は ジャックと、スズ。

先天性殺人鬼の妹と、後天性殺人鬼の兄の物語ストーリーを語るのはまた今度の機会にしよう。

そう、殺しを非日常としたまま殺人を三大欲求かの如く行う《本物》の妹と、

殺しを日常にしてしまい、殺すことを目的にしてしまった《偽物》の兄の噺など、語りだしたら止まらないのでやる意義が無い。

この物語ストーリーはあくまでも無意味に嘘を重ねる嘘の遣い手の物語なのだ。

しかし彼 彼女かもしれないが は二人の殺人鬼の物語ストーリーを始めても、柔和な笑みを浮かべて、全てから目線を逸らし、こういうのだらう。

「どつでもいい」

嘘だけだ。

\*\*\*\*\*

「殺人鬼。殺人鬼ね、はい」

絶対死ねない代理人からするとわりとどうでもいい肩書だが、問題はその殺人鬼の戦闘方法だった。

刀。つまりは近接戦闘。

ライホウや魔法などの魔力を使った攻撃には無敵といっても過言ではない。いや、唯一強化魔法だけが代理人に有効な魔法だ。防御力を誇る代理人は、言ってしまうえばそれ以外に弱すぎる。

暴力と殺人の世界を渡り歩く、本物の暴力者には決して敵わない。

「嘘じゃないですよ……」

呟く。

嘘かも知れないのに。

嘯くように、呟く。

トン、とジャックが刀の上から跳ねた。

時間の流れが遅く感じる。

ジャックはゆっくりと、空中を降り、地面に立った。

刹那。

「　　っ！」

パパパパパパパパパパパパパパパパパン、と幾つもの風船が爆ぜるような音が鳴り響いた。

銀色の魔力刃が何本も何本も代理人に衝突し、弾き消えた音だ。

「……む？」

青い殺人鬼は怪訝そうに代理人を見ながら刀を引き抜く。

「魔法は効かないのか？　ふうん、ならリリシャンが負けたのにも納得できるな」

コイツ……！

戦闘能力も、魔力も、経験値も、全てが全て、リリシャンに劣っているだろう。

けど、目的が殺人なら、経緯が殺人なら、

目標も意思も意向も手段も趣向も手工も手口も意味も理由も計画も存在意義も存続意味も無意識も本能も理性も何もかもが殺人にベクトルが向いたときの殺人鬼の戦闘能力は

あの赤色に匹敵するだろう。

「死は、平等だ」

口癖のように呟き、突貫してくる殺人鬼。

いや、うん、これはもうどうしようもないな。

「ご都合的主義でリリースさん辺りが助けに来てくれることを願って。

「死にます」

目を閉じた。

「おいおい【余剰部品】」

衝撃は、来ない。

「殺されかけてんじゃねーよ」

来たのはリリースさんでもなく、ましてやお迎えでもなく、

「そうですね……次からは気を付けることにしましょう」

「あほか」

金髪碧眼、ドッペルゲンガーと疑うほどに代理人とよく似た顔つき、ニヒルに笑みを浮かべるその姿は、男女不明なそいつが男に見えるほどイケメンだ。

どちらかと言えば女の代理人とは、まるで点対象。線対象。

【終着地点】こと、【真偽遣い】だった。

\*\*\*\*\*

「で、どうだった？ 俺のかつちよいい登場シーンは。惚れた？」

「貴方なんざに惚れるわけないでしょう、ていうかタイミングよすぎでしょうが」

「だろうな、だって遠くからずっと見てて最高のタイミングで登場しようと思機してたんだし」

「ああ成るほど……最悪ですねアナタ」

「お前みたい最低よりはましさ」

「それを言っちゃあ……ねえ」

世界で一番最低な人物。

世界最低。

何時だったか、リリースにそんなことを言われた気がする。

嘘……だっけ？

「おい」

仲良く会話してたのに何なんだよてめー、と言った感じで【真偽遣い】はギロリと殺人鬼を睨む。

「何なんだお前らは……兄妹か 何かか？」

「うーん、何なんだ、か」

「何なんでしようね」

「確か、線対象だったか」

「いえ、点対象でしょう」

「少なくとも赤の他人だな」

「ですね」

そうか、と殺人鬼は自分から訊いた癖にどうでもよさげに言う。

「よくわからん」

「……………」

そりゃそうか。

「まあいい 天体掌だか戦隊ショーだか知らんが、そんなことはどうでもいい」

「どうでもいい。」

「どうでもいい、どうでもいい か。」

「死は、平等だ」

死は平等、平等、公平。

そんなこと、そんなこと無いのにねえ。

「嘘だけど」

「真だろ」

まあ兎も角、戦闘開始だ。

名前とはただの記号です(前書き)

二か月経ってるウウウウウウウウウウ!

マジですいませんでした

戦闘シーンむずい

名前とはただの記号です

「なあ、代理人」

「何ですか？ リリスさん」

「そろそろアタシに敬語使うのやめないか？」

「嫌です」

「でも……」

「嫌です」

「ちよ」

「嫌です」

「……」

「……」

\*\*\*\*\*

そういえば、【真偽遣い】のもう一つの二つ名は【武器遣い】【無限武装】だったはずだが、【真偽遣い】の装備に武器は見られない。

黒いタンクトップに迷彩柄の短パン、短パンにはポケットが幾つかあるがナイフなどの武器が仕込まれてる様子は無い。

どういことだろうか、と代理人は思考するが、その暇なく、青い殺人鬼は動いた。

腰に収めた刀の柄を持ち、一直線に【真偽遣い】に向かって突貫。それに合わせるようにして【真偽遣い】も駆けた。

「  
織紙おりがみ」

何が起きたのか、何があったのか、何をしたのか。

代理人には、全く理解、視認できなかった。

トス、と軽い音を立てて、殺人鬼の持っていた刀の刀身が草原に突き刺さった。

「な………！」

「吹き飛びな」

【真偽遣い】の前蹴りがジャックの腹に入った。

その威力は凄まじく、青い殺人鬼は宙を舞った。

「くっ………」

しかしそこは流石戦闘のプロ。

蹴りが当たる寸前に後ろに跳んでたのか、殆どノーダメージな様

子で態勢を立て直した。

「…………へえ」

【無限武装】、あながち見当違いな二つ名じゃないようだ。

「この世界のありとあらゆる物質を武器として戦う　そんな戦闘スタイルから名付けられた名前だよ」

と、【終着地点】は代理人に説明した。

成程、わかりません。

と、【余剰部品】は答えた。

「まあ」

「全く」

「嘘ですけどね」

「<sup>マコト</sup>真実だぜ」

互いに決め台詞を言い、顔を見合わせた。

代理人は微笑み、【真偽遣い】は爆笑した。

「ぷはははは……、嘘なのかよ」

「真実でもないでしょうよ」

パン！　と、風船が破裂したような音が鳴った。

シャリン！ と刃物が擦れる音が響く。

「戦闘中におしゃべりとは……余裕だな……！」

ちなみにさっきまでの掛け合い、全てジャックと乱戦をしながらの会話である。

「おしゃべり好きなんだよ！」

【真偽遣い】が放った蹴りは魔力で構成された青い刀で止められた。

しかし、代理人がちよい、と青い刀を触ると、パン、と刀は弾けた。

「ふっ……！」

刀が無くなり、無防備になった殺人鬼の顔に【真偽遣い】の拳がヒットした。

「ぐ……！」

「てい」

顔を殴られたことで一瞬視界が潰されてたジャックの腹に、ナイフが突き刺さった。

代理人の隠し武器の一つである、流麗なフォルムのナイフである。

「……！ ……ブルーサンクチュアリ蒼龍の結界刀」

ジャックが呪文を唱えた刹那　ジャックを中心に蒼い刃が360°隙間もなく発射された。

「魔法なら効きませんよ」

パン！　と音を立てて消え去る蒼い刃。  
如何なる魔法も代理人には無力である。

「判ってるさ」

もう一発、蒼い刃がジャックを覆い尽くした。

魔法の使用者はその魔法でダメージを受けない。  
故に【真偽遣い】の唯一の弱点は魔法である。

反射しても利用してもダメージが通らないからだ。

魔法の連射に思わず【真偽遣い】はバックステップで距離を取った。

一方代理人は魔法を打ち消そうと手を伸ばし、

無防備の腹に、蹴りが入った。

「な……」

いきなり歪む視界。

一瞬、青空が見えたと思ったら、すぐに視界は変わり、自分がコ  
ンマ数秒先にぶつかるであろう地面が見えた。

そこから先は 眼を閉じた。

「がっ……」

軋む、身体。

蹴り自体は致命傷に至るほどの威力は無かったが、地面に打った  
場所が悪い。

後頭部、脊髄、その二つに大きな衝撃が走っている。

ガンガンと頭が鳴る。

死への警報が止まらない。

それでもなんとか立ち上がろうと、痛む腕で身体を起こし、霞む  
眼で前を見た。

そこに代理人の使っていたナイフを振り上げた殺人鬼がいた。

「死ね  
」

真っ直ぐに、ただ真っ直ぐに代理人はそのナイフの切っ先を見た。

徐々に迫ってくるそれを眼で追うも、身体が動かない。

動かせない。

自分の眉間までの距離残り数mmまで近づくまで、ずっと動かすに見ていた。

見ていたそのナイフはそこから見えなくなった。

根元からぽつきりと、折れてた　否、

切れてたのである。

「馬鹿な……！」

殺人鬼が呟く。

それは私のセリフです。

と、代理人は口まで出かかったセリフをすんでのところで止めた。

しかし、【無限武装】。ここまでチートだとは思わなかった。

一草原に生えてた小さい笹状の草を投擲して鉄製のナイフを切る  
とか（……………）  
……）。

人外、つうか、論外だろ。

「言ったる？　この世界にある全ての物質は　俺の武器だ」

続けて2度3度と草を放ち、ジャックを後退させた。

その隙になんとか代理人は動き、【真偽遣い】の元へ。

「全く、かつこつけすぎですよ【終着地点】、思わず惚れるところでした」

「ふっ……俺に惚れたら火傷するぜ?」  
「後悔はしますね」

軽口を叩きあつても、ジャックへの警戒は怠らない。

【真偽遣い】は地面から草を数枚引きちぎり、代理人はナイフを取り出した。

「さて、そろそろ幕引きですかね」

「ん? なんだ、切り札でもあるのか?」

ええ、とつておきがね。

と、代理人は身体を不自然な方向に曲げたり、身体を指圧し始めた。

そのたびに鳴る、カチ、カチ、という音。

「……何してるん?」

「ロツクを外してるんですよ」

カチ! と一際大きな音が鳴って、代理人は両手を上にあげ、腰を大きく反った態勢になった。

「おい、……まさか」

代理人が何をするのか解ったのか、ひきつった笑みで代理人を見る【真偽遣い】。

「はい、そのまさかです。さあ、レッツゴー」

「畜生覚えてろ！」

手に持ってた草を投げ捨て、【真偽遣い】は駆けた。

殺人鬼、ジャックの方向に、である。

当然、それを撃退すべく、ジャックも蒼い刃を右手に宿し、突貫。

黄と蒼がぶつかり合うであろうその中間地点に、

「よっこい……せー！」

代理人は、ナイフを投げ込んだ。

代理人の隠し武装のナイフ、総数153本。

その、全てを。

「ううおおおおおおお！　　どんだけ隠し持ってたんだよあのやろおおおおお！」

「【無限武装】でしょうが！　たかが150とちょっとしたナイフくらい使いこなしてくださいよー！」

「あれは比喻だよ、ハツタリだよちくしょおおおおおおお！」  
叫びながら、黄色と蒼は衝突した。

眼にもとまらぬ速さで剣戟が繰り広げられ、刹那、スライディングで【真偽遣い】がジャックの脇を抜けた。

トストストストストストストスト、と、小気味の良い音を立ててナイフが草原に突き刺さる。

そして、【無限武装】は倒れ込むように草原に横たわった。

「あー、畜生」

【真偽遣い】が呟く。

まるで勝負に負けたように。

「121本しか使えなかった、まだまだなあ、俺も」

朱い、どこまでも赤い血が、殺人鬼の全身から噴き出た。

ようつするに、代理人たちの勝利である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6219m/>

---

アンノウン

2011年9月27日21時53分発行